




南園會報

會報部備付



第三號

頁	正		誤	正		誤
	上	下		上	下	
53	上	十	誤	正		
50	上	十四				
49	上	六				
47	下	三				
46	上	表				
43	上	十九				
43	上	十				
37	下	九				
37	下	七				
36	上	四				
21	上	七				
8	上	十八				
8	下	十四				
7	下	初				
5	下	末				
4	下	十六				
	下	十六				
	下	十六				

頁	正		誤
	上	下	
62	下	七	
58	下	七	
47	下	六	

名	正		誤
	上	下	
阿部タケコ	上	十二	陳列所
田中ツルコ	上	十一	入られたる
(須佐村)	上	十	しつらひし
吉村キク	上	五	
佐々木フサ	上	四	
岡本ミチ	上	三	
岸 静子	上	二	
伊藤ユウ	上	一	
綿貫トキ	上	二	
高垣徳子	上	七	
阪部スマ	上	六	
安藤シナヨ	上	七	
かたらいし	上	七	

山口縣阿武郡立
實科高等女學校

南園會報

第貳號目次

● 口 繪

○南園館新御殿古代裝飾 ○同上御茶席古代裝飾

○第一回卒業生

○第二回卒業生

● 教 の 園

○吾人の覺悟及び希望…(1)

米原會長

● 學 の 園

○家庭の花…(4)

中野理事

○理科智囊…(6)

坂口理事

○室内裝飾に就いて…(10)

河原理事

○裁縫についての注意…(13)

安藤理事

○家庭體育について…(14)

本永理事

● 文 の 園

生徒作文……………二十一題(自3018至)

雁のたより

校外會員通信……………三通(自3531至)

本校の一年史……………會報部

一、開校式の舉行……………(36)

二、講堂訓話と心鑑……………(36)

三、朝會と讀物……………(37)

四、食堂と讀物……………(37)

五、久原家の美談……………(38)

六、指月城山の遠足……………(39)

七、石碑の移築……………(40)

八、第二回保證人會の開催……………(40)



大正十一年九月



大正十一年九月

- 九、陸軍記念日と講話……………(41)
- 一〇、第二回卒業證書授與式の舉行……………(42)
- 一一、先生の轉任……………(43)
- 一二、入學試験の執行……………(44)
- 一三、本學年の開始……………(44)
- 一四、先生の就任……………(45)
- 一五、身體検査の執行……………(46)
- 一六、寄宿舎の擴張……………(46)
- 一七、按摩のお稽古……………(47)
- 一八、舊師の訃音……………(47)
- 一九、校庭の利用……………(48)
- 二〇、羽賀臺の遠足……………(49)
- 二一、御大葬の遙拜式……………(51)
- 二二、稻作と挿秧……………(52)
- 二三、養蠶と製糸……………(52)
- 二四、野口内務部長の視察……………(53)
- 二五、歐洲戰亂の講話……………(54)

- 二六、赤星知事の巡視……………(55)
- 二七、野村男爵の來校……………(55)
- 二八、柴田貴族院議員の來校……………(56)
- 二九、上山前熊本縣知事來校の思出……………(57)
- 三〇、校長先生の上京……………(58)
- 三一、校業の進展……………(58)

●本會の一年史 ●

會 報 部

- 一、附設學業の發展……………(59)
- 二、忘年會の開催……………(59)
- 三、送別會の開催……………(60)
- 四、總會の開催……………(61)
- 五、大正二年度の決算……………(61)
- 六、我が會の役員……………(62)
- 七、同窓會開設の計畫……………(64)
- 八、會館設置の計畫……………(64)

●會 告●

●會員名簿●



飾装代古の殿御新館園南 日三月一十年貳正大



飾装代古の室茶御館園南 日三月一十年貳正大

九、陸軍記念日と講義……………(41)

一〇、第二回卒業式授勲式の舉行……………(42)

一一、先生の聘任……………(43)

一二、入學試験の執行……………(44)

一三、本學年の開始……………(45)

一四、先生の就任……………(46)

一五、身價検査の執行……………(46)

一六、寄附金の擴張……………(47)

一七、校舎の上棟式……………(47)

一八、講義の計画……………(48)

一九、校庭の利用……………(48)

二〇、購買金の進呈……………(49)

二一、御大葬の葬式……………(49)

二二、制作と挿絵……………(50)

二三、卒業と修業……………(50)

二四、野口内務部長の演説……………(51)

二五、陸軍軍旗の奉還……………(54)

●本會の一年概況

一、會費の徴収……………(55)

二、會費の支出……………(56)

三、會費の増減……………(57)

四、會費の運用……………(58)

五、會費の報告……………(59)

六、會費の徴収……………(60)

七、會費の支出……………(61)

八、會費の増減……………(62)

九、會費の運用……………(63)

一〇、會費の報告……………(64)

●會費部

一、會費の徴収……………(65)

二、會費の支出……………(66)

三、會費の増減……………(67)

四、會費の運用……………(68)

五、會費の報告……………(69)

六、會費の徴収……………(70)

七、會費の支出……………(71)

八、會費の増減……………(72)

九、會費の運用……………(73)

一〇、會費の報告……………(74)

金子桃代	松本	中野	金子桃代
宮本	藤井	松田	松田
カフ	キク	先生	先生
	河上		
	中島		
	ズエ		
	野上		
	サカ		
	野上		
	世良		
	先生		
	齊藤		
	ミドリ		
	佐々木		
	フク		
	松宮		
	先生		
	田中		
	冬子		
	田邊		
	ハル		
	山本		
	政子		
	松野		
	エキ		
	山本		
	幸		
	金子		
	ハツ		
	伊藤		
	コウ		
	小澤		
	敬子		
	松本		
	早知		
	松本		
	村田		
	ミツ		
	津田		
	エン		
	金子		
	タマ		
	高垣		
	清子		
	竹内		
	ミツ		
	倉田		
	チヨ		
	繪實		
	トキ		
	藤田		
	サト		
	藤井		
	先生		
	倉田		
	静子		
	平田		
	トシ		
	久保田		
	ミサコ		
	中村		
	學校		
	醫		



- | | |
|--------|-------|
| 大須田 三子 | 中林 壽壽 |
| 平田 三子 | |
| 倉田 頼子 | |
| 藤田 三子 | 藤井 栄生 |
| 藤田 三子 | |
| 倉田 三子 | 岡林 青房 |
| 菅内 三子 | |
| 高田 三子 | 菅内 栄生 |
| 金子 三子 | |
| 新田 三子 | |
| 村田 三子 | 本永 栄生 |
| 早味 三子 | |
| 小野 三子 | 中野 栄生 |
| 山本 三子 | 米原 壽壽 |
| 山本 三子 | |
| 山本 三子 | 豊田 栄生 |
| 田中 三子 | |
| 田中 三子 | 田宮 栄生 |
| 田中 三子 | |
| 田中 三子 | 田中 栄生 |
| 田中 三子 | |
| 田中 三子 | 田中 栄生 |
| 田中 三子 | |
| 田中 三子 | 中野 栄生 |
| 田中 三子 | |

世良先生	伊藤 於松
河原先生	小野 恭 倉重マコ 中村喜興子
高田先生	上田 正子 松村 きく 松村 六六
高田先生	藤本 ミヨコ 山下 カメ
松宮先生	照部 シヅヲ 今地 イシ
豊田先生	島田 壽美 中村 學校醫 上田 信子
米原校長	長見 キンユ 伊藤 霜
中野先生	神村 ヨシ 大崎 レン 大賀 チヨ
本永先生	三宅 節 中原 ユキ 山根 英子
竹内先生	河野 幸 阿部 マ 宮本 マカ 細 千代
河村書記	大岩 マサ 原 キカ
中野先生	阿部 ミサ 國司 シヅエ 原 チヨ
齊藤先生	安達 ハナ
鐵重アキ	小野 恭
多田マツ	藤本 ミヨコ
中原千代	照部 シヅヲ
三好貞子	島田 壽美
上田トミ	長見 キンユ
河村マミ子	伊藤 霜
三宅美緒子	神村 ヨシ
米成響子	三宅 節
岡 マカ	河野 幸
草刈マツ	阿部 マ 宮本 マカ
大中チイ	阿部 ミサ 國司 シヅエ



大正三年三月十九日 第二回卒業生

- | | |
|-----------|---------|
| | 齊藤 求主 |
| 大 中 下 | 中 禮 求主 |
| 草 原 心 | 河 林 喜 晴 |
| 四 心 | 竹 内 求主 |
| 朱 山 脚 子 | 本 末 求主 |
| 三 子 美 登 子 | 中 禮 求主 |
| 西 村 心 子 | 米 原 對 貞 |
| 土 田 心 子 | 豊 田 求主 |
| 三 枝 貞 子 | 外 宮 求主 |
| 中 原 千 介 | 高 田 求主 |
| 淺 田 心 | 阿 原 求主 |
| 藤 重 心 子 | 母 身 求主 |

山口縣阿武郡立 實科高等女學校 南園會報 第貳號

教の園

吾人の覺悟及び希望

米原會長

(1)

時世の要求は、女子高等普通教育施設の増加を促すこと、固より切なるものありき。然れども我が郡が、從來防長舊城下たるの位地を保有しながら、濫に風潮に動かされてこれが施設を急ぐが如きを避け、徐に慎重なる態度と、周到なる考案とを重ね、而して着實穩健にして貞淑真面目なる、良婦人を養成せむ爲め、特別な校地を下し、その設備は特別な厚意に依りて施設せられ、又特別に實科を標榜してここに設立せられたるものは實に本校にぞある。ああ設置の意義、豈それ尋常一様ならむや、此の校に教ふるもの又學ぶものの、須らく思をここに致さざるべからず。さなきだに現時人心の傾向は、頗る覺醒を要すべきもの少からず、女子教育に於て、最もその然るを感せずむばあらざるなり。苟も實科高等女學校が、單に技藝教授の完了を以てその本領にあらずせば、此の秋に於ける我が校の任務亦重からずとせむや。吾人の覺悟すべき點實に茲にあり。然らば何ぞ所定教科の授受を以て、能事終れりとはなすべき。又況んや此の校に來り學ぶの人、いかに一枚の卒業證

書受領を以て、修業の目的已に達せりと速断すべきやは。

世の婦女動もすれば、家政に必須なる實料の意味を誤解して、これを賤しむの感あるが如き、又猥りに女學生たらんの虚名を得むことに志さすものなきにあらず、斯の如きは我が校の精神、意義、その根本立脚を同うせざるもの、斯の如きは與に謀るに足らざるなり。予輩の覺悟、實に斯の如し。

然れども吾人の力や、固より微而して絶叫の聲又甚だ大ならずと雖も、特設せられたる本校存在の理由と、ここに教鞭を揮ふ所以、及び學ぶ所以、又學びたる所以を、各々確實に自覺し、眞に學問の要は品性の修養にある所以の深意を了解し、尙實科修業の本旨を感得し、専心孜孜として躬行に努め、實績を擧げて以て家國に貢獻せむこと、是れ、吾人が昭代に對へ奉るの道ならむのみ。

今や吾人の衷情幸に諒せられ、本校内外の協力援助に因りて、校内の教育的生命は、日に月に漸く生長しつゝあるを覺ゆ。是れ最も留意すべき事實ならざらむや、又最も反省奮勵すべき事實ならざらむや、吾人は一面卒業生の誠を籠めたる音信に接しては、その心得の穩健にして、其行爲の着實なるに、一層の勇氣鼓舞せられ、各地に本校分身の實現せるが如きの觀あるを見て、一は以て至大の愉快を感じ、一は以て大に世の期待に負くあらむを懼る。吾人の日夜熱誠祈りて己まざるもの豈他あらむや。苟も笈を負ひ本校に學びたるものは、所謂口の人にあらずして實行の人、浮華にあらずして謹直の人、眞靜感恩の人、勤勉禮讓の人、快活寛厚の人、温情和平の人、難事に自ら當るの人、與へらるゝ運命を甘受するの人、逆境に屈せずして新運命を開拓するの

人、高潔にして常に犠牲的の生活を覺悟する人、又日常逢着の苦痛を向上鍛練と觀する人、而して一家を己が身に引受けて立ち得るの人、斯くして而して賢母たり良妻たるを得べきなり。我が校校風の生命激烈として、幸に活ける教育となり斯の如きの人物、續々我が校門より世に出づるを得るの期あらむこと、是れ吾人熱烈の希望なり。その任や實に同窓諸子の上に係る。

見よ彼の松下村塾を、實に一世を風靡するの一大生命は、こゝより發揮したるにあらずや、吾人徳、敢て此の如きの力固よりこれなしと雖も、志は實に茲に存す、苟も籍を此校に置きたるもの、奮てその蹤跡を辿らむかな。再言す吾人耿々の微衷は常にこゝに在ることを、予輩は校外會員並に在校の會員と共に、本校設立の意義及び本校が抱持する如上の精神を閑却せず、一意此の光明希望の域に努力奮進することあらむのみ。

見よや、彼の小さき蠟燭、如何に遠くまで光を放つよ、

邪なる此の世に善行の輝くも、亦斯の如し、

學の園

家庭の花

中野理事

○秋風浙瀝、天地漸く悽涼に入り、滿目蕭條として囑目轉々悲愁を帶ぶ。たゞ見る野花點々、村路山徑を綴りて、其の間を美化するを。配合の奇、對照の妙、吾人亦詩的情緒の油然として起るもの無くんばあらず。

○婦人は家庭の花なり。其の容姿假令花に類せずとも、其の心の花の薫る所、秋風蕭殺の氣時に家を襲ふことあるも野花の荒野を美化するが如く、陰鬱悲愁の家庭の小天地も化して地上の樂園となり、人生の慰安所とならむのみ。況して春風堂に滿ち、歡笑室に溢るゝ家庭においてをや。

○家庭の平和の中心は主婦たらざるべからず。主婦は如何にして家庭の平和を造り得べきか。至誠は其の經なり、才幹は其の緯なり。之れに加ふるに、春風の如き徳性と報恩感謝の精神とを以てす。一家の平

思ふ、と何ぞ必ずしも貧しき時に限らむ。富貴なる時も亦良妻に負ふこと多きぞかし。

○日も没せぬ大英國の宰相として天晴其の政事を執りさばき、赫々たる功業を青史にかざりしグラッドストーンは、金婚式を擧ぐる時に述べて曰はく余が結婚の當時より樂しみ來りし家庭の幸福をば、適當なる言葉もて之を滿堂の諸君に知らしめむとするも到底能はざるなり、と其の如何に妻に負ふ所大なりしか推するに餘りあらずや。

○良人に慰安を與へ、光明を與へ、良人の業に同情し、而して能く家事を整へて内顧の憂無からしむ。是れ妻として眞につとむべき所、エマルソン曰はく死に至るまで變せざるものは心情のみ。容色の美何ぞ長く人を欣ばしむるに足らむや、一層美麗なる心情の之れに代はりて働くにあらずば、夫妻の情交眞にきよきを得べからず、と味ふべき言なり。

○かへらじとかねて思へば梓弓なき數にいる名をぞとゞむる、是れ人口に膾炙せる小楠公辞世の歌、其の誠忠千古の下涙襟をうるほさしむるものあり。而して賢母の教訓、實にこゝに到達せしむる其の前提た

和は求めずして來り、招かすして到らむ。俚語に曰はく笑ふ門には福來る、と吾人必ずしも福をのみ求めずとはいへ、一家の繁榮も幸福も平和裡より生出し來ると知らずや。

○人多く良妻賢母といふ。良妻賢母もどより可、而も一家の平和を求めむと欲せば、他により多く考へざるべせらざることあり。請ふ世の實情に照らせ。是れ良嫁の必要なる所以なり。

○良嫁の必要なる、一家の平和の上よりのみならず、我が國は實に家族制度の國なり。其の制度今なほ嚴として存し、忠孝の道、祖先崇拜の念いと盛なる國なり、而して舅姑ありて良人あり、舅姑は實に良人の根元なり。至誠の心感謝の情もて舅姑に事ふる、是れ第一につとむべきことならずや。

○晋の文公初め落魄し、諸國を流浪して食を乞ふ。時の大諸侯齊垣之に女はして優遇至らざるなし。文公之に安んず、妻姜氏之を諫めて曰はく行け懐と安とは實に名を敗る、と是れ有名なる左傳の一節なり。落魄の文公一躍して遂に覇者となる。良人の賢妻に負ふ亦大ならずや。語に曰はく家貧しければ良妻を

りしを知らずや。如意輪堂邊昔を訪へば春風林に入りて落花繽紛、少壯花と散りにし彼の忠死を忍ばしむるものあり。

○藤公少時、風雪烈しき日、主家の使して寒に堪へず、途次暖を我が家にとらむとす。阿母之を叱責す。是れ藤公餘影に記す所、藤公天縱英邁なりしとはいへ、少時なほ此の如きことなきににあらず。而して公老いて益々剛健卓犖、克く君國の爲めに東奔西走、席暖まるに暇あらざりしもの、賢母の赤誠より進りし此の教訓の功無きにあらざるべし。公晚年、公務を帯び風雪烈しき北韓の地を巡視す。知らず、白皚々たる雪の原に願望して少時を追懷せしや如何に。

○諺に曰ふ、三つ兒の魂白まで、と幼時母の膝と懷とは實に其の天地、母の思ふこと、爲すこと、言ふこと、教訓すること恰も電氣の電線に傳はるが如く、目にこそ見ね暗々裡に其の腦中に感應浸潤す。而して其の印象は長くして將來の精神行動運命を支配す。木に切痕をつくる、其の成長する毎に癩痕益々大なるを見ずや。

歐米近時女子教育の理想に漸く新傾向を生じ來れる

理科智囊

坂口理事

は喜ぶべし。新傾向とは前世紀に流行せし男女平等觀に對して男女差別觀是れなり。われをして眞の女子たらしめよとは眞に自己の尊嚴を自覺したる女子の叫びなりしなり。而して是れ實に前世紀の迷夢をさます曉鐘たらずとせむや。

○人多く口を開けば自覺といふ。眞の自覺や甚だ尊ぶべし。吾人世の婦人の眞の自覺を翹望すること切なり。

○語に曰はく山川秀麗の地偉人を生ず、と菊ヶ濱邊松風譚々たる處、島山淡く前に浮び、煙波縹緲、白帆靜に往來す、指月山頭半輪の月、影は阿武の清流に入りて流れ、長橋江に横はる處、金波銀波影激瀧、亦山川秀麗の地たるに愧ぢず。

○秋の地、もとより名君賢相傑士學者の輩出せし處、而して賢婦人の史上に著はるゝもの亦尠からず。語を寄す、南園の窓に螢雪を同じうせる諸子、よく先人の跡をつぎ、野花點々、家庭の花となりて薫らるむことを。

さに變りはない。

○恥かしい時に赤面するのは、如何ですか。又氣分の悪い時に青い顔するのは、如何ですか。

恥かしい又は困つた時には、頭の脈管運動神經が麻痺する爲めに、血管が膨大して多量の血液が一時に顔面に來るから顔が赤くなる。又其の反對に、頭の脈管運動神經が興奮して血管が收縮し血液が一時顔面より退却するから、急に青白になるもので、此の場合は氣分が悪い時である。

○春は四方霞多く、秋は霧に立ち籠められる。そして秋は空が澄みますのは、如何なる理由でありますか。霧と霞とは同じものである。極細かな水滴が空氣中に浮遊するものである。春には霞と云ひ、秋には霧と云ふ。春や秋には、地面が日光を受けて急に温まると同時に、地上の物體に宿れる露其他の水分が、水蒸氣となりて上に昇る。其水蒸氣は上方の寒冷な空氣の爲め、何程も上らない中に、冷えて水滴となりて降る。高地は平地より一層寒冷であるから、水蒸氣を含んだ暖風が、忽ち霞や霧となる。春よりも秋が能く澄むとは、一概には云

理科教授は、可成生徒の疑問を捉へて、此れを出發點とするならば、生徒に興味を起さしめると共に、日常の疑問を解決する事も出来るが、又通俗的の身近の智識を授ける事も出来ると思ふ。其れで生徒の日常の疑問を集めて、此れに解釋を施した其中の數題を撰んで、此處に掲げる事とする。

○太陽が出入の時には、空高くにある時よりも、大きく見ゆるは、何故でありますか。

太陽は朝だから大きく、日中には小さくなること云ふ事はない筈である。只吾等の目にて、其の様に見ゆるのである。其の理由は色々あるが、朝夕は太陽が山の近くにあるが、山と比較する事が出来るから、大きく見ゆる。日中は高く上つて、あたりに比較するものがないから、小さく見ゆる。一に比較するものは比較するもので、大きく見わたり小さく見わたりするものである。太陽を洋燈の傘(白乳硝子)にて見る時は、日中も夕方も其の大き

はれながら、秋は雲の高き天にあるから、澄む様に見ゆる。

雨晴るゝ里の夕餉の煙かど

おもへば雲ののぼるなりけり

○舟に乗りて酔はない様にするには、如何に致しませうか。

舟に乗りて酔はない様にするには、先づ第一に、身體が壯健でなければならぬ。其れから第一に胃が強くなくてはならぬ。其れで舟に乗る前には、あまり多くの食物を食べない様にする。第二に、舟に乗るには、位置を撰ばねばならぬ。可成多く動搖せない所に乗る。其れには舟の中央に乗る様にする。そして横にならず、腰かけるなり、座るなりが、最も宜しい。又横になりて眠るもよき工夫である。第三に、仁丹等の藥品を時々飲み胃の弱らない様にするも宜しい。次に船暈を治療する法を述べよう。船暈を橋める人には、赤色の眼鏡を以て、暫し何所ともなく眺めて居るとよくなる。元來船暈は腦中血液の缺乏の爲めに起るものである。赤色の眼鏡は血液の缺乏を補ふからである。

○月或は太陽の周圍に、輪の生ずる事あるのは、何故でありますか。

空氣中に澤山な水分がある時に、太陽から又は月から、吾等の眼に來る光線が、途中で屈折する事に依りて月或は太陽の周圍に輪を生ずる。若し大氣中に氷結晶が澤山ある時には、見事に綺麗な輪が出来る。此れをコロナと云ふ。月の場合には暈と云ふ。環の内側が赤で橙黄緑青藍紫と色が並んで居る。又此れに類似した現象が種々ある。湯場にて水蒸氣の立つ中に、電氣燈又は洋燈があれば其の火の圍りに輪が出来る。自分の眼鏡が水蒸氣でくもる時に、此れで火を見れば火の圍りに輪が出来る。それから虹の出来るのも、此の中にはいる。

○地球も一つの星であるのに、動植物が棲んで居ますが、他の星も地球同様な動植物がありますか。若しありますならば、あの高い所に空氣がありますか。若しお月様には山や谷がある。暗い影の所は谷で光る所は山であるが、空氣がないから勿論動植物はない。他の星は未だ充分研究せられては居ないが、火星と云ふキラキラ光る星には、學者の研究に依れば、

- (一) 鶯が聲高く鳴く。(二) 蜘蛛が家の壁に現れる。
- (三) 鳥が聲高くなりなく。(四) 燕が空高く飛ぶ。(五) 蝙蝠が夕方澤山出る。(六) 鼠が天井でさばく。(七) 猫がお化粧する。(八) 雞がはいたたきする。(九) 鳩が巢に歸る。(十) 魚は水面に浮ぶ。

一筋に心さだめよ濱千鳥

いつくの浦も波風ぞ立つ

○水甕の外側に露が出来る。雨期が近づいたのであると云ふ事を聞きますが其れには理屈があるので御座いませうか。

理屈が大いにある。又事實である。水甕は常に寒冷であるが、雨の降る少し前には、暖くなつて空氣が蒸して來る。此の蒸して居る空氣が、水蒸氣を多く含んで、飽和の状態であるが、急に寒冷なものも、水蒸氣などに接すると、水蒸氣が冷えて水滴となる。即ち露となる。此の露が水甕の外側にくるのである。其れで降雨の前兆を示すのである。

雨露に打たるればこそ紅葉も

錦をかざる秋はありけり

○冬、手水鉢等の水は凍りましても、硯の水の凍らない

ば、空氣があつて、何か動物が居るらしい。火星の一面に運河の様なもの、澤山出来るのが見ねるから、何でも人間よりも余程智慧の多い發達した動物が居るであらうと云ふ事である。

○夜の明けんとする前に、雞が歌ひ、雨の降らんとする前に、蛙の鳴くのは、何故ですか。雞や蛙には其の生理上何か前兆でもあるでせうか。

雞や蛙の心理状態になつて見ないと、慥な所は判然しない。昔、神代に天照大神の岩戸にお隠れになつたとき、雞の長鳴鳥を歌はせた所が、岩戸が開いて、大神は岩戸よりお出ましになつて、暗の夜が明けた。其れから雞が、夜の明ける前に鳴くと云ふことである。しかし雞の生理上から云へば、雞の脚が暖かになると鳴く、昔は雞の足の所に、火を近づけて暖かにして、夜明けの聲を早やめたと云ふ話がある。朝は温度が漸く暖くなるから、脚の温度の加減で鳴くのであらう。雨の降る前には温度が變る。又雨の降る前には氣壓が變るから、蛙が其れを皮膚で感ずるのであらう。西洋では、俗に下の如く云うて居る。雨の降る前には

のは、何故で御座いませうか。

手水鉢等は、多くは家外にある。硯箱は家の中に特に人の居る所に置いてある。其の爲めに家外と家内とは余程温度が違つて居る。其の爲めに手水鉢は凍りても硯は凍らないのである。此れが主なる原因であるが、水の中に他の物質が溶解して居るときは、凍り難くなる。即ち凍点が下る。例へば、海水は鹽分を含むから河水よりも凍りがたい。霜のきぬこほりの床に夜を重ね

寒さたへたる池の鴨ざり

○富士山の頂などでは御飯がよく煮ないのは、何故ですか。

空に上ると空氣が薄くなり、氣壓が低くなるから、水の沸騰する温度が降る。平地での沸騰点は、攝氏百度であるが、富士山頂では、八十七度である。沸騰点が下れば、此れ以上に熱する事が出来ないから、御飯がよく煮ないのである。

室内裝飾に就いて

河原理事

私は室内の裝飾に就いて、大した意見などもつて居りませんが、私がまだ學生時代の頃、研究の爲め東京の上流や中流の家庭を訪問させて頂きました時、其の家族の人々から趣味ある處を伺いました事や、其時其家庭に施してありました室内の裝飾に就いて感じました事やらを、思ひ合せて、こゝに御話し致す事にしました。

一、室内裝飾の必要。

終日外にあつて心身を勞して歸りました時、裝飾もない室内が取亂されてある時には、心身の慰安どころではありません、不氣分を益々不氣分に誘ふのみで、小言の一つも多く出る様になつて参りますが、其反對に奇麗に取片附られてある部屋に、しかも、閑雅優美に裝飾されてある處に入ります時には、如何に疲れ果てた心身も、自然と爽快になり、野卑な欲望も、閑雅優美に導かるゝものであります。又居室に吊した英雄豪傑や、忠臣義士の肖像筆蹟

青色・緑色・青色を用ひて、涼しげに。秋は物寂しい外界に對して、茶・濃赤色・濃紫色を用ひて、何處までも引締り、最も情趣を表す様に。冬は寒き四邊の光景に對しては、快活にして温暖の氣味ある、黄色・赤・橙色の色彩を用ひて、自然の色に調和する工風をする事も裝飾上大切なる事でありませぬ。

第三 場所と場合に應じたる室内裝飾。

室内の裝飾は、場所と場合を考へねばなりません、即ち海濱の邸宅には海濱の趣味を要し、村落の邸宅には田園の趣味を添へるのがいゝと思ひます。此れと同じく、庭園にも相應する様、即ち老松數種、石もあり小流もあつて、丁度山林的風致ある庭に面したる室内裝飾には、やはり山林的趣味を表す事が必要であります。又吉凶の大禮にも、それぞれ適當したる裝飾が必要でありますことは申すまでも御座りませぬ。

第四 統一のある裝飾。

すべて裝飾には、主となるべき點がなくてはなりません。それは一室の裝飾中いづれも中心點がある事が必要であります。例へば客室の裝飾は、床が主眼となり、また書齋は机の上を中心點とするか、書棚の上を中心點とするかは、其

に對する子供達は、いつとはなしに深い印象を受けて、識らず知らずの間に、偉大なる感化を受けます。

かく室内の裝飾は、人生の生活に多大の趣味と慰安と、かつまた感化をも與ふるものであります。併し室内の裝飾には、一定の法式と道筋とがありまして、徒に金を費して、高價な品物ばかり澤山ならべたからと云つて、それで高尚優美な裝飾の目的が達せられるものではありませぬ。然らばどんなに室内をしなならいゝかと申しますと、

第一 各其室に適したる裝飾。

が必要であります、即ち其室の趣には如何なる趣味の裝飾が適するかを考へねばなりません。要するに、座敷は座敷らしく、書齋は書齋の様に、各其室の特殊の趣味を現はす様に注意せなければならぬと存じます。

第二 裝飾と季候。

裝飾は季候に多大の關係を有して居るものであります故、季候の變遷に伴うて裝飾もまた相應に變化させなければなりません。即ち春は外界は悉く緑でありますから、色ものを用ひますれば、之に調和のいゝ、黄・橙色・淺黄・又は空色を用ひて陽氣に若かくしく。夏は寒冷の氣味ある暗

時々によりて考へる事が必要です。そして其他の裝飾は、主眼を表す爲めの補ひとなる位に止めて置くのです。それでないで、裝飾は無意味になり、折角の貴重な裝飾品も、骨董屋に並べられたものと同じになります。

第五 裝飾品の對照。

裝飾用具は、其大小・形狀・色合を程よくして、よき對照を得せしめることは、裝飾上一大要點であります。例へて云へば、一方に丈の高いものを床飾とすれば、他の方には丈の低いものを置き、又一方に色の非常に華美なものを置けば、他の方には濼味のあるものを置く様にありたいものです。されば金瓶や七寶の麗はしい花瓶に、牡丹の赤色・肉色の花をさしますよりは、さつぱりした籠の花器に、其牡丹をさしました方が、餘情がある様に思はれます。立派な花瓶に牡丹をさしますと、美はしさは十二分になるので、反つて其美を失ふのであります。

二、次に各室の裝飾に就いて申し上げます。

第一 玄關の裝飾。

御承知の通り玄關は外より這入つて來る人々に、第一番に印象を與へる處であります故、裝飾の意匠は、成るべく眞面目で、固苦し

からず、淡白にして其中に温雅の趣味のある様にあ
りたいものです。何處の玄關でも、餘り明るい間取
には、なつてゐない様ですが、すべて陰氣な室に用ひ
ます装飾は、色を成るべく白かまたは出来る丈け明
るい様な色を用ひます事に注意を要します。

第二 應接間の装飾。こゝは客と應對する處で
ありますから、沈着な眞面目な、餘り濃厚でない装飾
が必要です。初めての來訪者に、深い印象を與へるの
も、この室ですから、よく考へなければなりません。

第三 客間の装飾。こゝは客を禮遇する所であ
りますから、成るべく美麗な装飾が適當であらうと
存じます。濁つた色や暗い色は、最も嫌ふ所でありま
すが、それかと云つて、下品の趣味となつてはいけま
せん。

第四 書齋の装飾。こゝは讀書をし、また調べも
のをする所ですから、自然長く居る様になります。そ
れて其装飾は靜に清らかに沈着な趣のある様に、そ
してまた充分に心身の慰安となる様にせなければな
りません。またこゝには、賢哲の肖像等を加けるな
ど、獎勵的意味のある装飾をするのもよからうと思

裁縫についての注意

安藤理事

何か裁縫について有益なお話でもと思ひますけれど
も、まだ經驗の浅い私には、皆様に御満足を與へる様な
研究談も持つて居りませんので、誠に残念に存じます。
それで茲には、私が修業中に失敗して感じました事や、
工夫してかなり良好な結果を得ました事を、普通小袖
の裁縫について二三申し述べ、皆様の御参考に供した
と思ひます。

一、凡て反物を裁ちます前には、必ず、糸抜け・汚点・織
斑等の有無をよく査べる事を忘れてはなりません。
夜分などに、十分査べず急いで裁つて仕舞つて、後に
よく見れば大切な處に見苦しい疵の出る様になつて
居る事が往々あります。それで裁ち切らない先に十
分査べ、少しでも疵がありました時は、それを目立た
ない處、例へば下前の衽や衿先などに出る様に、色々
工夫しなければなりません。

二、次に標を附けます時に、絹布や、毛布に篋を用ひる
事はよくないと思ひます。絹布の縫ひ返し物などに、

ひます。

第五 食堂の装飾。食堂と申しました處が、日本
では上流の家庭を除く外、純粹な食堂がある家は少
なからうと存じますが、この食堂の意味は、家族が
毎日集つて食事を致します室と見てよろしい。此の
食堂は成るべく愉快な感情を起す様に、そして出来
る丈け明るく、且あざやかに装飾する事が必要であ
ります。殊に食卓上に花瓶を用ひて、何か一寸した
花でもさすと云ふことは、大切な装飾でありまして、
此れがため家族の氣分を引立て活氣を帯びて何とな
く陽氣な睦まじげの趣を添へるものであります。

前に述べました室内装飾は、もつともよく其の主人
や主婦の思想・感情・趣味の如何を發表するもので、一
見其人の品位の高卑をも知らるゝものであります。さ
れば室内装飾の最も品致ある様、これに接する人を優
美高尚に誘致するの心掛は、主婦として、最も大切な
務たる事は申すまでもない事でありまして、これまた
家政の一要素であります。

處々前の篋の跡が光つて見えるのは、見苦しいもの
で御座います。又メリンスなどには、少し強く篋をつ
けますと、地質の痛む恐れが御座います。それで絹、
毛布は、なるべく糸標か、又は餘り焼けて居ない條鍔
の様なもの安全で御座います。木綿物で御座いま
して、なるべく短く篋をつけ、袖口・袖附・身八ッ
口・劍先・衿先等の篋の跡が表に現れない様に注意せ
ねばなりません。

三、重ね物などは尙更で御座いますが、普通一枚の小
袖でも縮緬を用ひましたものは、必ず衣紋竿などに
掛けて、丈査べをして裾を合せませぬと、縮緬はこ
かく弛むので下に置いて標をしたのは當になりませ
ん。従つて衽もやはり縮緬はいくらかつめなければ
なりません。

四、地質によつて、どうも袖口がびりびりして困る様
な事が御座います。そんな時には薄い半紙をよく揉
み、鏝でよく押し袖口切と裏袖との間に挟んで鏝を
かけ、そうして綿や糸のつれない様に含み綿をして、
締める時には餘り深く綿まで抄はぬ様に、ゆるやかに
に拵けて置きますと、きれいに出来る様で御座いま

す。又振や裾口にも、薄い布で裏打ちを裏布にいたしますと、工合がよい様に思ひます。

五、綿を入れます時に注意の必要を感じましたのは、真綿を一寸でもつらさぬ様にする事で御座います。

真綿は前に十分きれいに伸して置き、布の上には弛る目に引かねばなりません。真綿を縦横十文字に條が立つ様に強く張つて入れますと、出来上つてから表がふくふくいたしまして、落ち附きが悪く、折角きれいに縫ひましても綿の工合の悪い爲めに仕立物の値を落して仕舞ふ様な事が御座います。

六、仕上の際は、直接に火熨斗を布地に當てない様に、必ず薄い布か紙を用ふる事が肝要で御座います。直接に火熨斗を掛けた爲め、火熨斗の跡が厭にさらさらと光つて取り返しのつかない様な事が御座います。そうして火熨斗を掛ける順序をよく考へて致しませぬと、全部に行き當らなかつたり、折角きれいに掛けた處に又悪い癖を附けたりする様な事が御座います。

以上は技術についての私の食しい経験で御座いますが、其他に裁縫をする者にとつて最も注意しなければ

ばならない事だと深く感じましたのは、針を大切にす
る事で御座います。よく生徒の仕上物などを見ます時
に、衿の先きや袂の底に針が這入つて居るのを見出し
ますが實に危険な事で御座います。それで使つて居る
針の数は何時も定めて置き、一本でも紛失致しました
時には必ず見當るまで探す事が大切で御座います。
世の中が次第に進歩するに従ひ、女子の心得て置く
事も次第に多くなりますが、殊に裁縫は古今を通じて、
女子の生活上最も大切なもので御座いますから、お
互に今後益々之に興味を持ち、研究を怠らない様に務
めたいと思ひます。そして舊來の裁縫術について少し
でも工合の悪い様に思はれる處は、色々と考案して、著
用者の體格や使用の場合等に最も適當する様に、又衛
生上、經濟上、裝飾上等の諸点にも注意をして且迅速に
精巧に仕立上げ得る様に工夫し努力する事は誠に興味
ある事と思ひます。

家庭體育について

本 永 理 事

健全なる精神は健全なる身體に宿るとは、西洋の昔

の格言であるが、近世科學の進歩と共に、精神と身體との關係が益々明になるに従つて、益々其のことが認められて來た。人生第一の幸福は、身體の健全なことである。昔から「命あつての物種」といつてるが、唯生きてゐても、健全でなければ自分が不愉快なばかりでなく國のため家のためにつくすことも出来ないのである。

世の中が文明に進めば進む程、人々は益々強健な身體を要するもので、どんな仕事でも段々複雑となり、困難になつて來るから、從來のまゝの身體では、次第に仕事の方に負けて、遂には心も身體も衰弱するやうになるのは、自然の結果である。世の政治家や教育家が、國家のために體育を奨励し、個人が生命尊重の自覺によりこの體育を實行するのは、至極結構なことであるが、近頃は大きな會社や多くの職工などを使ふ工場などで、運動場を設け器具を備へて、これに多く出席する人には、いろいろの恩典を與へてゐる所がある。又運動會や遠足などを催して居る所は澤山にある。蓋、元氣が旺盛で體力の活潑なものの製造に係る物品は、其の分量も多く且品質も良好であるので、結局會社側では差引利益になるのである。これは運動についての例であ

るが誠に面白い體育上の事實ではないか。

我が國民の身體が、漸次薄弱になりつゝあることは、いろいろの方面から、統計上又は事實によつて、説明されてゐる二三の例をいふと、日本人の生命は、今から三十年前までは、平均年齢三十九才であつたのが、だんだん短くなつて、現今三十年位だとのこと、生命の短いのはよいとして、日本は世界で一番に藥のよく賣れる國だとのこと、毎日の新聞紙を見ても推量は出來るのである。又平均年齢が短い位であるから、統計を見れば二十三十の働き盛りで、死ぬる人が餘程多い。北里博士は「日本の青年には年々肺病患者が増してゐる。然るに歐米では老年者でしかも其の数は年々減じて居る。實に我が國民は警戒すべく、且憂慮すべき状態に在る。」と、しかし現今非常に劣つてゐるにしても、急に焦つたからとて仕方がない。英國人の如き、今より四十年前までは、平均年齢二十七であつた。其れが英人四十年間の體育的努力は、現今五十歳余りになつてゐる。獨逸も略これに似て居る。だから吾々は進歩した體育の理法と實驗とに基き、國家のため自己のため、着實に氣長に、實行して効果を擧げなければならぬ。

「汝の國の少年を見せよ。然らば汝の國の將來をトせん」と健全な少年は、健全な母がなくては得られぬ。又旺盛な体力により、働き出さるゝ富も、強健元氣な壯丁も、健全な家庭より生ずるとすれば、健全な家庭は實に健全な主婦の手中にあるといつても過言ではあるまい。我が國民の身體上より考へて、我が國婦人の責任は實に重大なものではあるまいか。果して然らば、家庭の主婦たるものは家庭の體育に注意して、其の實をあげなければならぬ。今左に家庭體育上、特に注意すべき要領を記さう。

一、身体的方面

第一 飲食

生活の原動力である飲食物は、適度に攝取すべく、腹の慾にかられて、衛生上害あるものや間食などは、謹まねばならぬ。

營養素の調和や、各體質と獻立などにも注意しなければならぬが、「鹽加減より腹加減。」といふことは、一層大切であると思ふ。其の他愉快に食事すること、刺戟物を多く用ひぬこと、生水を飲まぬこと、口中をよく掃除することなどは、何れも大切であるが、今一面排泄の方にも、氣を付け

ねばならぬ。

又飲食物は前述の如く大切ではあるが、簡易にすることにしなければならぬ。多數の簡易生活中、食物については特に大切である。昔から俊傑と呼ばれた人の家庭は、實に簡易生活であつた。西郷南州翁が、或時弟從道の所に行かれて、食事の時刻が来たから、下女に命じて食事をして居られると、從道さんが歸宅して共に食事しようとして其の余りに粗末なるを見て、下女を責めらるると、南州翁は側から「其様なことは何うでもよか」といはれた。從道さんは之を聞いて、熱々感じ「俺は逆も兄哥には叶はない。」と人に語られたといふことである。又近くは乃木大將夫婦の生活が如何に簡易であつたかは、吾々の度々聞いた所である。將來家庭の子女を教育するものは、考へねばならぬことだと思ふ。しかし食物は何でもよいといつても、主婦たるものは、料理法には熟練してゐる必要がある。

第二 空氣

新鮮な空氣を多量に呼吸することの必要なきことは、いふまでもないが、ナボレオン一世

が將卒を採用する標準の一に、鼻の孔の小さい男はとらぬといふことがあつた。其の理由は鼻の孔の大きなものは、氣力が旺盛で將卒たるに適するといふことであつた。實に人命は呼吸にあるので、その呼吸の強弱はまた實に忽にすることのできないものである。

第三 日光

日光は人を快活にし、又殺菌の効力があるから、身體や衣服や夜具などは、日光に晒さねばならぬ。深窓の佳人となることは感服が出来ない。又寢間や炊事場の暗い家には、病人が多いと昔からいつてゐる。實に注意すべきことではないか。

第四 清潔

常に衣食住を清潔にするは勿論、身體の皮膚を清潔に又丈夫にするため、冷水摩擦を毎朝行ふがよい。皮膚の丈夫なものは、風邪にかゝらぬばかりでなく、發生學上では腦が丈夫になるといはれてゐる。

第五 運動

運動は身體諸機關の新陳代謝を旺にす

第六 姿勢

行住坐臥に應じ端正でなければならぬ。昔は「かみ女にそり男」が、理想的姿勢であつたかも知れぬが、下腹部に氣力の蘊蓄せられた正しい姿勢が望ましい。

第七 睡眠

年齢に應じて、相當に熟睡せねばならぬ。活動を重んずるものは、休養を怠つてはならぬ。最急の汽車でさへ、十五分停車をして炭を積み水をつぎ油をさすではないか。以上諸項は規律正しく實行することが第一である。

二、精神的方面

第一 正直

正道を踏み好んで善を積めば、天佑を蒙りて福壽を得る。

第二 快活

常に愉快に心を持ち、艱難に遇ふとも、逆境に處しても、狼狽苦慮することなく、笑つ

文の園

日記の一節

第一學年一の組 河村 信子

げによく晴れた涼しい夏の日であつた。書齋の窓を半分開けると、庭の垣根の朝顔が、今を盛りと咲いて居る。

折から松の木の後の方で、今年やうやう四つになつた隣の子ちやんが、垣にとまつて休んで居る、蜻蛉を捕らうとして、草履をぬいで、おぼつかない足を引きすりながら、一足づつよつて行く。蜻蛉は何も知らぬ風に、羽を前につぼめて、頭をく

て處理することが大切だ。心痛は人を殺す刀である。一生の幸福は、一日の幸福の繼續で、一日の幸福は、朝の幸福の繼續に外ならぬ。人は朝から愉快に、其日其日の勤めを果すが大切で、常に希望に起きて感謝に眠りたいと思ふ。

第三 趣味 何事でも趣味を解する人は、心身常に活氣があつて老朽しない。余は信仰と園藝との趣味をおす、めしたい。

第四 注意 大いに注意力を養ひ、用心して難を避け、最善の良法を選んで實行せねばならぬ。

るくるとまはして居る。

をかしさをこらへて見て居ると、行子ちやんは、左の足に力を入れて、體を前にかたむけ、ソット手を出した。とたん、バット蜻蛉は垣根を越して行つてしまつた。

その時、風がもつれてたれる柳の糸をなびかせて、机の上にあつた本の四五頁をはらはらと開いた。

朝顔

第一學年一の組 後藤 フミ

薄霞こむる夏のあした、井の端に立ちし歌人の、釣瓶奪ひしその花、わが愛する朝顔よ。朝な朝な籬のもとに美しく咲きて、われを待つかのごと。

そつと縁より下りて、庭下駄のま、朝露踏みて、赤が幾つ、白が幾つ、しばらくが幾つと花の數讀むは、わがあ

したの楽しみにぞある。

時々、あと慕ひ來る妹達は、永く永く咲きてゐたらむにはと云へど露の干ぬ間のその命こそ、かへりて、花の操はあらはるるなれ。

残月の影淡く、四圍眠覺めぬ清き夏の朝まだき、お朝顔よ、そは美しきなれの世界ぞ。

やがて、秋風立ち初むる頃は、いたましき姿にかはるならむを、星光る夕、うまさ水與へるとき、一しは美しう咲き出でよ、わが愛する朝顔。

夏の夕

第一學年一の組 松本 静子

そよそよと吹く夕風に誘はれて、裏より續く細道つたひに、隆景寺ヶ濱へどあゆみをはこびぬ。

一面の青葉は茂りにしげりて、そが中よりみねほこりもなき夏花の、三つ四つ咲き出でしもかへりて床しく、赤々としてりはなし夕陽も、いつしか西に沈みて、餘光僅に名残りの色を止めつ。薄墨色を流したらむ様に暮れ行く空は、しばしの間に黒瑠璃色とかはりぬ。大照院の鐘の音は、水の面つたひに静けき濱の黄昏を破

りて、餘韻ながくあたりにひびきぬ。指月の山へどねぐらを急ぐからすのむれ、三羽、四羽、……五羽。果てしもなき大空には、はやキラキラとまた、きする星影、あれや銀河の流れならむ。折からサト松ヶ枝をか

すめて吹き來る涼風に、草葉はゆるぎて、ダイヤとまごう白露は、ホロホロと惜しげもなく地にくだけぬ。いつしか観音院の燈明も上りて、螢火のそれかごもあやしまる。ほのかににはふ夕月は、日輪山をはなれて、

神々しき光を小波にやごし、あるはその影を千砂になげ出だせし風情いはん方なし。長蛇の如き竹本橋は、しづかに體を波上によこたへて、岸の松原よりはらはひ出でしがごと、今は徒らに暗黒々として死せしが如く、また匍匐の勢だになし。

ふと草の一本よりおこりし蟲の音に、我にかへれば、夜風にはかに身にしみぬ。あゝ此の美しく静かなる景色よ、さらば又尋ねむと、をしき別を告げ夜露に足をうるはしながら家路へと急ぎぬ。一點だに曇なきいざよいの月は、はや靈椿山の上に微笑みて、あたりいよいよ静まりぬ。

夏の海邊

第一學年二の組 小河 キク

水や空、空や水なる大海原の夏の日ほど、心地よきものは又とあるまじ。

親しき友と手を取りかはし、波をけだて、水に入る愉快さ。やがて、水泳にもうみ、岸に上りて松の木蔭に腰を下せば、涼しき風は、水面より來たりて暑さを忘れしむ。

日も早西に傾けば、彼方此方よりむらむらと立ち上る夏雲の景色も亦興あり。

夕映に美しかりし海、いつしか暗くなり行けば、夕月の光のみ僅に水面を射て、金波・銀波の眺またなく美し。

納涼

第一學年二の組 柴田 きく

晝の暑さを洗ひ流したやうな夕立が、しきり來てしばらくすると、忍びやかな夏の匂ひを漂はした夕風が、夏草の色取りよい繪模様はやうな中を、静にくぐると同時に、青々と繁りに繁つた木木の小枝を動かした。そ

秋の夜

第一學年二の組 瀧口 澄江

「キ、キ、、リーンリーン」あゝ蟲の音しげき秋は來ぬ。さなきだに眺淋しき秋の夜、亡き魂まつる鉦の音のごと、遠く近く草葉に叩きて、また一しほの哀を添へぬ。やがて、上弦の月は上りぬ。庭の白萩月に照りて雪の如し。

白露をこぼさぬ萩のうねりかな
芭蕉の句意もしのばれていとゆかし。

折しも虫の音一きは立ちて聞ければ、

露しげき野になく虫の音をそへて

われは思はず口づさめり。

空はいよいよ澄み渡りて、月色ますます清からむとする時、非常を警むる柝木の聲、夜陰を破りてあたりにひびきぬ。ア、夜は更けたり。われを待たる、母上の心やいかに、惜しき名残りもあとに留めて臥しど入りぬ。

控所にて

第二學年一の組 吉岡タケヨ

今し食堂から吐き出されるやうに、列を正して出て來た私共は、廊下づたひに控所に入った。窓に倚つてお話を始める人、編物取り出す人、さては讀書の聲、問答の聲、さまざまである。私はこの中に唯一人じつと窓によつて外を眺めた。傍のカーテンがはたはたどかすかな音を立て、居る。小さい雨はやうやく小止となつて、冷たい風がひやりひやりと吹いて來る。花卉園に、雨に打たれたコスモスが、窓越に夢のやうに咲いて居る。すらすらと氣持善く伸びた莖、あつさりとし

別れ

第二學年一の組 高橋タカ子

五とせ六とせもろ共に おなじ學の窓の内

た花の色、なんと云ふ優しい花であらう。何處からか白い蝶が一羽、コスモスの上を舞うて又何處へか飛んで行つた。あはれ秋の胡蝶よ、霜おく夜をいづこ如何なる花に宿かるであらう。先頃まで枝もたわゝになつて居た柿は、早全くもぎ取られて、あの紅色の甘そうな實は一つとして見ぬない。向ふの山々もだいぶ黄ばんだ。あの山には今栗も落ちて居らう。一昨年までは、なつかしい故郷の山でよく栗を拾つた。散り敷く落葉をかきわけて、澁金色の大きな實を取らうとする時、小鳥の小石を落すのか、栗の實の自らはじけて落ちるのか、ころころがさど云ふ音に、思はず身を縮めて四邊を見廻す事もあつた。こゝ女學校の控所から思は遠く七里の外なる故郷に馳せて、それからそれへと胸に浮ぶ。ふと我に歸ると、どんよりと曇つた空からは、復一しきり時雨がして來た。二三羽の鳥が啞々と鳴き連れて彼方へ行く、と授業の鈴がもりんちりんどけた、ましく校内に鳴り響いた。

たがひに勵みはげまされ
光のごけき春の日や
五月雨晴れぬ夏の日も
いとも楽しくすごしけり
月日の流れ早くして
櫛風沐雨に異ならぬ
我身に來る老い忘れ
つゆけき袖を分ちてぞ
學の庭を出でたりし
心はとほに變らじと
かたみに涙しほりつゝ
月の前行くほとゝぎす
たとへ海山へだつとも
共に學業はげみあひ
昔たのしき思ひ出を

姉の許に

第二學年一の組 花村 秀子

秋風をよそよと吹き居り候折柄、姉上様には其後御健かに居らせられ候由、御よろこび申し上げ候。次に私事もお蔭様にて無事に通學致し居り候まゝ、はゞか

りながら御心安く御思召し下され度候。
さて一昨日は祖母の參り候て御厄介に相成り、その上姉上様の御馳走にあづかり候由にて非常に喜び居り候。よろしく傳へくれよと申し候。
祖母より承はり候へば、御母上様には昨今御病氣にて醫藥に親み居られ候とのこと、誠に驚き入り候。
又弟ことも、足の病氣未だよろしからずして、一日おきに玉木病院に通はれ候由、これまた三月以來永々の病氣にて、皆々様にはさぞかし御心配の事と幾重にも御推し申し上げ候。
姉上様には、この頃は天長節の前にて他所よりの御仕立物も忙はしきに、家事の御整理や、弟の看病や、何より何まで未だ年行かぬ姉上様の御手一つにて處理し給ふ御心づくし、同情の涙にむせび申し候。
一人書齋に入りては姉上様の御身の上を思ひ、この厄年も早く過ぎ去り、來る立春の風こそ内に滿つるやうにとそればかり蔭ながら祈り申し候。
されど姉様よ、世は無情なり、何時如何なる事變の出來して、人を窮境に陥らしむるやも計り難ければ、平日より少しの苦痛をもしのびて、母に事へられての孝

子たるこそ、亡き父も草葉の蔭より定めし喜ばるゝこと、存じ候へ。
次に私事は一人父母の膝下にありて日々修養を積み居り候。而して圓滿なる大家庭の實科高等女學校にまで通はせて戴く我身の幸福をつらつらと思ひては、感謝の念に堪へざる次第に候。されどこの内にありても姉様を寸時も忘るゝ事はなく、特に晝食後いろいろと有益なる御話を承はる毎に姉様にも聞かせ參らせば、如何程の御喜びにぞやと思ひ候へども、思ふまゝにならぬ世の中、これをよく記憶して宅にて日誌にしろし、後日、御目にかゝりたる時これを繰きて、互にその喜びも共にせむ日のあらはやとそればかり待ち居り候。
ごもかくも姉様よ。次第に寒くなり行く空なれば、御母上様の御病氣にもさはること、存じ候へば、何くれとなく御氣をつけて御看護遊ばさるゝやういのり上げ候。いづれ御見舞には參上致すべく候へども、とりあへず御見舞申し上げ候。あなかしこ。

散り行く花

第二學年二の組 井本 龜子

全世界の平和の花は散りたり。

日獨戦争の幕は開かれ、燃々のぼれる戦の火に、眠れる國民は立ち上り、兵士は肉をおごらせ、劍を取りて遠き海外に出で大和魂を丸にこめて、鮮血流れて川となり、屍は山をなす、その中をものともせず君國の爲め命をまことに戦ふなり。立てよ人々、忠勇無二の同胞が戦場の花と散り行くに、いかで安閑として居らるべき。町村の平和の夢をやぶる召集の呼び聲は、いかに我等國民の耳にひびきしみわたるぞ。あゝ平和の神はいづこに行き給ひしか、戦の火は何故燃え立ちしか。治まる御代に眠れる者は、常に平和の花の散り行くを忘るべからざるごとく、に、日常勤儉の二字を忘るべからず。これ君に對する忠ならずや。勤儉はいづこの國にても大切な事なれども、殊に我が日本國に必要なるぞかし。

秋夜の讀書

第二學年二の組 石井 壽萬

馬も肥ね、人も肥ゆる秋の空の、塵ばかりの雲もななく澄み渡るに、今し松の梢にかゝれる月の清けさ。吹き來る風に身も心も打ちしめりて、細り行く虫の音を

ききつ、洋燈のもとに心ゆくばかり讀書することの
樂しさよ。或は千古の人に接し、或は萬里の外に遊ぶ
心地して、夜のふけ行くを忘るゝは秋夜の讀書になん
ある。

げに花に木かけに紅葉に雪に世に樂しみ多けれご
も、この樂しみにまさる樂しみはあらじかし。

されば我等はこの好期を利用して、大いに學業に勉
勵し、以て徳を修め、智を磨き、立派なる人とならむ
覺悟なかるべからず。澄みたる空にいよいよ高うかが
やく月の益々清きが如くに。

暮秋の思ひ

第二學年二の組 工藤 富美

都路はいかに、このしづが伏屋に渡るる月は、有明の
影に霜おいて、早や名残り惜しき秋の、くれとはなり
ぬる今日この頃、人のけはひも少くなりて露けきもの
を、離によりてたけだかに美しく咲きほこりしコスモ
スも、あはれや嵐にやつれて、夜床下近き虫の恨みと
同じ思ひに夜をあかすらむと覺ゆるに、風だになくて
その花ははらはらと散りゆきぬ。

浴びつゝ今日の日も亦暮れぬ。惜しき哉といはむばか
りにまだかひがひしく立ち働くもあり。仕事も終へぬ
とく歸むと家路を急ぐもあり。

夕日山にかくれたり。急げ牛よ、わが友よ。森の木
蔭暮れはて、こなたには二匹の牛を追ひつゝ、或は高
く、或は低く、聲はがらかに歌ひ行く牛追ふわらべあ
り。親におくれしか、はた友におくれしか、二羽の鳥は
寂しく二度三度呼ばはりながら、わが樂しきねぐらへ
とはせゆく。今宵は如何なる夢をか結ぶらむ、とくかへ
れかし、二羽の鳥よ。父母の在します樂しき家へ。

歸途、隆景寺の墓地に歩を移しぬ。本尊を安置すべ
き御堂はなく、訪へども答ふる僧はなし。線香も絶わ
絶わに讀經の聲も聞こえず、箒手にする人もなし。唯
氣まゝに生ふる雜草は、所嫌はず生ひ行き、古木も鼻
のふしごとあれはて、昔の面影を留めず。榮枯盛衰
の習とはいひながら、あまりのあはれさに涙の流るゝ
も禁しがたくて袂を絞りぬ。折からの秋風に足はやう
やう我が家に向ふ。さらば亦來む先の日に。幾百の靈
よ、安らかに。
轉じてかなたを見んとす。白水山の頂上には龍田姫

あはれ明日ありとのみ心にたのみて、いたづらに今
年も秋を暮しはてぬ。心の駒にむちうつとも進みがた
きは學びの道なるに、思ひさだめしことごもの半ばを
もはたしねで、むなく春におくれ、夏におくれ、は
た又秋にも後くれぬ。げに人の身のたよりなきを思へ
ば、いともはかなきかぎりこそ。

晚鐘の音を聞く頃は

第三學年一の組 平木 ハナ

晚鐘の音を聞く頃は、夕の暮はやうやう地に落ちむ
として、平和の村も忙がしく、つぼみの如き稚兒は皆
遊びし友とうちわかれ、疲れ果てながら温かき母の元
へぞ歸り行く。

春の盛には、我が一小村の人々を樂しませ、或は嬉
ばししも今は如何に。其の愛でし陽氣なりし景色は、
唯淺茅が原と化し行きて、秋は寂しく野にみちぬ。

小松江の晚鐘は、あの山門を越えて阿武の水を越ね、
荒れたる野をふるはせて平和の村にぞひびき落つる。
夕餉の煙はこゝかしこに立ちのぼりて、椿の山麓をか
すめぬ。黄金の波うつかなたの方にて、農夫は入日を

のまたゝきあり。やがて川添の家々には灯火のかけ三
つ四つ天の星と共にかやく。弦月の光は淡く下界を
照して夕のどばりぞ破たれにける。

夕空はれて秋風ふく、月かげ落ちて鈴虫なく。
懐郷の情に堪へざる調は、ごこりどもなく沈黙を
破りてわが耳に聞ゆ。晝の神はつひに西山に没してい
よいよ夜の世界と化し果てぬ。
實に晚鐘の音を聞く頃は、何處の里にも詩趣多きぞ
かし。

秋の庭

第三學年一の組 松井 文子

暑さになやみし夏も、蜩の聲ごどもにいつしか去り
て、花壇の菊花日毎に咲き亂れ、秋やうやく酣ならむ
とす。
瑠璃色の大空は、風もなく愈々高く愈々清く澄み渡
り長閑なる小春日和なり。枯木の如くなりし櫻すらけ
ふ此頃の暖さに春と感じしならむか、彼處此處に白き
花ちらちらと咲き出で、垣根の芙蓉は靜に笑み初めぬ。
紅葉は秋のおとづれごどもに色づきて、照る日の光と

白水仙の頂上には龍田姫

相映じ、いよいよ紅となりて美しいはんかたなし。
日當りよき南の縁には、小猫柔かなる光線を浴びて
さも心地よげに眠り居りし折柄、小鳥の一群あわただ
しくちちと啼きて柿の木にとまりぬ。小猫は其の聲に
驚きてむつくと起き出でたりと見るや縁を飛び下り、
針の如き眼をことさらに圓く見開きて柿の梢を見上げ
たり。

小鳥はちつと小首を傾けて思案顔の體なりしが、俄
に何ぞ思ひ出したる如くばつと飛び立ちて土蔵の屋根
の向へと逃げ去りたり。小猫はいまいましげに眼こす
りこすり何處へか姿をかくしぬ。

瓢箪形のさゝやかなる池には、赤き金魚幾つも列り
て樂しげに鱗うちふりつゝ泳ぎまはり、其のたび毎に
漣をさらさらと立てたり。汀に生ふる野菊たゞ一輪そ
のやさしき姿を水の面に映し人待ち顔ににこにこ。
コスモスは今を笑顔に咲き揃ひたり。今しも一羽の
白き蝶しばしの宿をとて花に宿りし其の刹那、はらは
らと音もなく花びらの散りしに驚きてばつと上へ舞ひ
上りたるは、哀にも又をかしきことにこそ。
あゝ、樂しきは秋の小春日和なり。蝶よ來りて舞へ、

汝なるぞかし。

秋色

第三學年二の組 能美満壽子

春霞かすみて去にしかりがねも、早や秋霧の上に鳴
き渡るきのふけふ、春の眺めにも劣るまじきを、いか
で仇にすこすべき。袖打ち拂ふ涼風に心誘はれ、久々
にて門邊をさまよへば、いよゝ忍ばるゝ野邊の秋色。
夜毎の時雨はうすくこく千草そめなす色おもしろう、
流れかすかなるいさゝ川にしづめる自然の姿、手弱女
のかたちつくるはぬに似て、いと憐に面白し。
先づ秋は寂しきも悲しきも數多あれど、樂しき事も
亦多かるべし。稲田低う飛び交ふ雀の聲、をちこちに
聞ゆるも、濱千鳥の聲身にしみて、ひしほみちしほを
知らせがほなるも、亦心慰むるわざなり。

されどまた秋の水ばかり淋しきは、なかるべし。
桐の一片に龍田姫音づれ給へば、水の音もそゝろに閑
寂の趣を添へ、千早振る神代も知らぬ龍田の流れ、唐
紅に水くゞるてふ幽趣をぞしめすなる。殊に沓わゆく
月影に、八千草の上における白玉は、鳴き渡る雁の泪

鳥よ來りて啼け、ともどもに長閑き秋の日をば樂しく
過ごさむ。

栗拾ひ

第三學年一の組 片山 ヨシ

「拾へと落ちるは栗よ、」と云へり。
今年も一番の樂みは、秋の栗拾ひなり。草鞋に脚絆手
籠の準備にて、ぼつぼつ山路を上る。

遙か向うに栗林見ゆ。急ぎ急ぎて麓に行けば、栗の
いがむけ出し質など、彼方此方にころがり落つ。一心
不亂に兩手にて拾ひ、いがはいがのみ籠に取り込む。
木の葉つもりてかくれし上を踏む一足毎に、一つ二つ
どころがり居るも面白や。

時々嵐に吹き落されて、針のやうなる固りが頭をさ
すも恐ろしや。木の葉がくれの泉の水にせきごめら
れ、或は草鞋の上につもれるもあり。手早く拾へ
ば蟲穴あるもかしこよ、またくうちに栗は手籠に
あふれぬ。樂しき林に別れをつけて、名殘惜しくも歸
る。
あゝ栗よ。汝は我等のうさはらし、一年の樂みも亦

かど怪まれ、秋の哀の身にしむ心地とする。

また草葉にすたく虫の音の、あるは高く、あるは低
く、調べあはせたる妙なる玉琴の音にもましていと清
し。あはれこの音雲の上まで澄み渡らは、月の宮なる
天津女神もさこそ耳かたおけ、舞の手振りも亂れめど、
思ひやるだにいと床しき心地す。

母の感化

第三學年二の組 渡邊 保子

凡そ古今東西聖人君子偉人名將と歌はれし人、枚擧
するに遑あらず。しかもかゝる人は大抵其の母の感化
によりて聖人となり、君子となり、偉人となり、名將
となりて徳化四方に及び、勇名四隣に轟き、以て芳名
を後世に貽し、が如し。

人のこの世に呱呱の聲をあぐるや、一様の人間なり。
この時に當りて、その母の賢なる否によりて、そ
の子の一生の浮沈何れにか決すること多し。幼兒の最
も相親しむは母なり。されば母たるものは一言一行に
も小兒の前途を思ひて深く深く注意し、後日あつばれ
君の御用にたつべき人をつくらざるべからず。その子

秋色

第三學年二の組 能美満壽子

春霞かすみて去にしかりがねも、早や秋霧の上に鳴
き渡るきのふけふ、春の眺めにも劣るまじきを、いか
で仇にすこすべき。袖打ち拂ふ涼風に心誘はれ、久々
にて門邊をさまよへば、いよゝ忍ばるゝ野邊の秋色。
夜毎の時雨はうすくこく千草そめなす色おもしろう、
流れかすかなるいさゝ川にしづめる自然の姿、手弱女
のかたちつくるはぬに似て、いと憐に面白し。
先づ秋は寂しきも悲しきも數多あれど、樂しき事も
亦多かるべし。稲田低う飛び交ふ雀の聲、をちこちに
聞ゆるも、濱千鳥の聲身にしみて、ひしほみちしほを
知らせがほなるも、亦心慰むるわざなり。

されどまた秋の水ばかり淋しきは、なかるべし。
桐の一片に龍田姫音づれ給へば、水の音もそゝろに閑
寂の趣を添へ、千早振る神代も知らぬ龍田の流れ、唐
紅に水くゞるてふ幽趣をぞしめすなる。殊に沓わゆく
月影に、八千草の上における白玉は、鳴き渡る雁の泪

にして親の言にそむき、不品行なるは、母の責任にあらずや。孟子の母は機を裁ちて之を戒めたり。我が子のためには如何なる艱難と雖も聊も辭せず甘んじて之を受けざるべからず。往々にして「父嚴に母慈に」の意を取り違がへ、我が子の爲すに任かすが如き人は、母の天職を全うせし人にはあらず。胡蝶飛び交ふ園生の花の他の花に比して雅麗なるは、多大の勞力を厭はざるの結果ならん。況むや人間に於てをや。
されば將來母たる人は、その感化の大なるを知り、その天職の重きをゆめ忘るゝことなかれ。

阿武川の秋

第三學年二の組 塩見 菊代

河畔の紅葉、一葉二葉ひらひらと清流の面に漂ふ。

あゝ阿武川よ、汝もや、深き秋風に誘はれしや、長堤の櫻すでに黄ばみ、百舌鳥の囀り、さすがにゆきかひの人をして耳を傾けしむ。

水色いよいよ碧く、澄み渡りて、流の真中逆る小舟、下り行く筏、舟子のさものんきげなるとりごりをかし。向ふ岸に釣する翁、手に竿、傍に籠、ときどき竿の弓

感せらる。

黄金の波打つ海原に、稻穂を啄む雀の羣を朝な夕な取りたる稻をせおいつゝ三人四人又二人、木枯の吹き拂ひたるすゝきをわけて我家へいそぐ。

空にはいつのひまにか、玲瓏たる一輪の明月あらはれて残る隈なく下界を照らしぬ。秋夜のあらしは、庭の落葉にあたりてがさがさと音立て、時々は我が書齋にも訪れてごうごうと淋しげなる物音す。叢に物悲しげにすだく虫は、この秋の夜長をなき通すらむ。

父母の膝下にはあれど、他郷の此地に物學ぶ我身に慰安慈悲の光を漏らせるこの秋月を目にしては、毎日の樂園たりし故郷、數年の昔涙をのみて袂を分ちし幼時の友の事など、千々の思ひに走せ、懐郷の情はいよいよわが胸にせまり來りぬ。

月見れば千々に物こそかなしけれ

わが身一つの秋にはあらねど。
どはいかなる人のすさびにやあらむ。

のかたちになるを見る。

ゴーンと流れ來し大照院の夕の鐘、何處にか消ね失せぬらむ。折節叢にすだく虫の音も、いとあはれ深う、皎々たる月光の、清流の面に映すれば金波銀波漂ひて橋行く人の影、夢の如く水にうつるも趣あり。

あゝ汝は遊人の伴侶たり、慰藉者たり、どこしへに健在なれ。

秋の夕

補習科 長見キシコ

鈍き秋の夕日は、西の山に姿をかくし、秋雨に露に朝夕染められし紅葉の火の如く燃わて、緑色濃く結べる一叢の竹林の間に残りぬ。

餘韻嫋々として淋しげに響き渡りしは、遠き寺院の鐘聲なるか、碧く碧く澄みて塵と見るべき雲もなき大空には、はや夜の星夢の如くに瞬きとむ。點々散在せる山邊の茅屋より立ち騰る夕餉たく煙の行末は、淡く雲に化してはともなく消れて行く。ふと彼處に眼を轉すれば、白き脚絆に笠背にせる一人の旅人のいづこもあてながほに秋の黄昏の中を行くありて、いと心細う

田舎の秋曉

補習科 阿部 ミサ

東雲の空漸く橙の色を帯び、曉風かろく殘虫の聲を亂して破れたる芭蕉にそよげば、有明の月夢よりも淡く、久方の空に残りて僅に夜のなごりをこぼす。垣根の朝顔は天上の星よりも微かなり。鳴き残る虫の音遠近にきこね、冷かなる風は面を吹きて心氣爽快なり。石にせ、らぐ里川の岸には、野菊小萩犬蓼など今を盛り咲きほこりて、こゝかしこ、白く赤く黄に紫に亂れ、糸柳のゆるく川面になびけば、いなご夢よりさめて水に飛ぶもの三つ二つ。

稻もやうやう色づき、置きあまる露こぼれて雨の如く案山子にとまる、雀などいそいと興あり。木蔭に見ゆる茅屋より引けるなるこの今しも鳴らむとす、雀の心いかにあるらむ。彼の畑の中にて鋤を杖にして立てるは、耕すにつかれて休むなるべし土手のあたり動めく人馬、後になりつ先になりゆく様繪にも似たり。

折しも東雲の橙色は眞紅となり、再び橙の色にかへれば野明け、山明け、水明け、聖の教のひろがりゆく

慰安慈悲の光を漏らせるこの秋月を目にしては、毎日の樂園たりし故郷、數年の昔涙をのみて袂を分ちし幼時の友の事など、千々の思ひに走せ、懐郷の情はいよいよわが胸にせまり來りぬ。

月見れば千々に物こそかなしけれ

わが身一つの秋にはあらねど。
どはいかなる人のすさびにやあらむ。

が如し、茅屋より立ち上る白げむり、斜に老杉の梢に漂ふところ、淡月一痕消ぬむと欲してなほ夢よりも白きを見る。

女子の天職

補習科 大中 テイ

男女各其性質を違へ、職分を異にするべきは、獨り我國のみにあらず、世界いづれの國といへども亦然るべし。されば男子と異りたる職分、即ち女子の天職とは果して何ぞ。

姿雄々しき大船の、山なす波濤を破りて海洋を走るは、推進機の作用に由り、推進機の動くは、内部に原動力あればなり。現世社會の表面に活動するは主として男子なり。而して此男子のよく活動するを得るは、女子あるが爲なり。其妻よく内助の功をあげ、疲勞せる夫の勞を慰め、以て再び活動すべき勢力を養ふ、是れ最も女子に適合せる天職なりといはざるべからず。次は嫁として、老いさき近き老人に孝順の道をつくすにあり。老人に孝順なるべきは、獨り女子にのみ限らずといへども、常に其身邊に従ひ、些少なる事にも心づけ、衣服食事の世話などなす、これ亦女子の天職なり。

りといはざるべからず。入るを計りて出づるを制す、夫の勞苦を無益に費さず、節儉力行一家の經濟に留意し、以てその幸福と繁榮とをきたすべきなり。すべて、女子は家庭平和の王たるべき天職あるを忘るべからず。家庭内常に春風吹き渡るが如き温かき家庭をつくること緊要なり。終りにのぞみて、最も大切なるを子女教育とす。是れ國家の盛衰にかゝる一大事業にして、忠孝なるも、不忠不孝なる國民をつくり出すも、概ね母の指導如何によること少しとせず。幾百人の師よりも、一人の母の感化甚しきものなり。故に常々貞淑温良なる母たらむことを心掛け、善良なる國民を養育するに努むべきなり。

以上述べたるが如く、一家の家政をつかさどらむとする女子は、其性周匝緻密にして、よく従順敬愛の情を以て良妻賢母良姑良主婦たるの婦徳を養ふに努めざるべからず。さるに世運の進歩するごとともに、外來の惡風潮時に襲來し、近代女子は男子と同じく自活し、又一生獨身にて暮すべきなりと思ふものなきにあらず。此等は女子の本分を誤るものといはざるべからず。諸姉よ、願はくは我國の美風たる女子の天職を片時も忘るること勿れ。

雁のたより

校外會員 在東京 藤井 キク

百花園の秋草の色に故山の秋色をしのび候のみにて秋もはや酣に相成り候折柄校長先生はじめ諸先生並に會員の皆さま方にはお變りもあらせられず候や御伺ひ申上げ候

さて南園會報第二号御發刊の趣承りことにこの度は校外會員通信欄も設けられ候よしさてはお別れ申せし皆様の御消息承る事もやどうれしく私もかくはまはらぬ筆をとり申し候

思ひめぐらせば去年の夏お別れ申し候てよりはやくも一とせと半ばはすぎ申し候南園の學び舎の一とせはげにげに思ひ出多き事に候よ當時もつとも年下の妹にておはせし皆様たちもはや最上級のお姉様とならせられ御卒業もまぢかに候かと思へば只夢のやうにてさてその間のわが身はごかへりみればこれと思ふ事もなし得ずいたづらにあかしくらせしことのはづかしうも口

惜しうも存せられ今更ならねど光陰のはやきがかこたれ申し候

當地に參り候てより滿一年目の今日筆どり候もいかなるにしかどなつかしう候

過る一日乃木將軍の御邸あどに參り候御質素なる御住居とは兼ねてきゝ居り候へどかくまでとは思ひ及ばずみる人をしておのづこ襟を正さしむるやう覺ゆ申し候御殉死の室の御血潮のあどはわづかにみどめらるるばかりきわうせ候へど君の御名はごこしへにつぎざること候はむ乃木神社の前に至れば更に更に感慨無量かしこき人のみまへにはおのづから頭はさがり申し候遊就館の乃木室には將軍夫妻の御殉死の時御着用遊はされし御禮服御刀などありてこも亦悲しき思ひ出の所に候ひき

世は秋なれば都大路もさすがにもの淋しう候につけ大照院の森の紅葉も紅に燃いで候はむ橋本の流れには釣する舟の日毎に多くなりまむならむとなつかしき思ひ出の胸にみち候て夢はそらるに故山にはせ申し候御なつかしさのあまり筆どり候へどもまはらね筆にては何事もつくされ申さず候

時節柄御身御大切に遊ばされ候様あけくれに念じ申
し上げまゐらせ候
かしこ
十月二十六日

校外會員 在徳佐 田邊 ハル

おなつかしい會員の皆々様お別れ致して後如何にお
暮し遊ばされますかお伺ひ申し上げます月日の立つは
矢の如しなご昔から申して居りますが實によく申した
もので皆様とお別れ申してはや一年といふものが過ぎ
たのでございませうつらつら考へて見ますとちようど去
年のこの頃縁の時節も過ぎて世はいつか赤葉と變りう
ら悲しい時でございました離れ難い母校を後になつか
しい友と袂を分ちて獨らびしく大海原に出たやうな氣
で出立して徳佐校に職を奉じ教育の任に當る幸の身と
なりました

それより今日に至るまで身に病一つ致しませず無邪
氣なかはゆい數多の子供を相手に或は教室に或は校庭
に授けつ遊びつ致して楽しい楽しい日を過ごしてゐま
す之といふのも一は師の君様方のお情一は皆様のお蔭
と深く感謝致して居りますすけれど又一方には我が母校

のやうに否より以上のやうな感じが致します之を考へ
合せますと我が師の君様方が如何程私どもに就いて御
心配遊ばしたかが伺はれて改めて高き御恩を感謝せず
には居られませぬこの最も高き御恩を幸に知ることを
得ました私は一意専心我が職に務めまして師の君様方
のお心を安め參らせまして御恩の萬分の一なりとも報
い申さばやと窃に心に誓ひ居ります以上は私のこの道
に入りましての感じた儘を申し述べましたのでござい
ます御大切の紙面をつまらぬことに汚しまして失禮致
しましたその内皆様御身御大切に遊ばされ御機嫌よく
いらせられ御いそしみの程祈り居ります

村田 事

校外會員 在東京 永井 ミツ

大きやかなる望みを持ちて生れ出でにし南園會報の
齢を重ね候との御端書廿四日の黄昏時頂戴致しうれし
さはせばき袂につゝみかたうおぼわ申候深く深く御祝
ひ申上候
光陰矢の如く隙行く駒の足搔の早きこと今さら申す

と離れ我が友と別れ獨らびしく他郷の空に暮してゐま
すので楽しいにつけ悲しいにつけ先づ思ひ出されるは
母校に居た時の事ばかりでその度毎に開校記念の會報
第一号を繰り開き又は卒業の記念寫真を出しなごして
之を唯一の慰安とし僅にその私情を制してゐますこの
度會報第二號發行の由承りうれしくてうれしくてどう
ぞ早く參れかしと眞に鶴首して待つて居ります

扱「子を持つて知る親の恩」とは古から申し傳へてゐ
ますが師の恩も自身が教ゆる人となつて始めて眞の師
の恩を知る事が出来ると思ひます師の恩の深いものと
いふことは誰も存じてゐますけれどございふことを眞に
のであるか如何程高いものであるかといふことを眞に
知り得るには自から師とならなければ分らぬ事と思ひ
ます只今私の直接世話してゐます學級は尋常の四學年
で男子が二十二人女子が十三人でありますこの中一人
としてかはゆくないと思ふ子供はありませぬ成績の悪
い子はそれだけ多く情が加はり如何にかして善く出来
る様に導きたいと日夜工夫をこらしたり又弱い子はそ
れだけ多く氣はかゝり寒いにつけ暑いつけ心配にな
つたりしましてちようど自分の眞の子か或は弟や妹か

もおこがましく候へど昨日今日とおぼわし開校式南
園會報の初聲あげし記念の日ははや一年の昔と相なり
申候

されど夢の様なるこの間にも世はいたく移ろひ申候
ものかな彌生の春親しき友と思出多き學びやを出で泪
の袂絞りつつ西へ東へ別れゆき私ばかり遠き吾妻へ參
り申候胡馬北風に嘶り越鳥南枝に巢くふ習にて雨のあ
した風の夕にふるさとのさま思出ぬ日とては御座なく
候まして「淋しさに宿をたちいで眺むれば」と古びた
の歌にも見わけける此頃の夕は又ひとしほにて候御した
はしき師の君や南の園の大和撫子いまいかにさては昔
の我家亡きたらちねのことゝも偲びて思ひの糸は小
さき胸裡に搔いもつれ申候かゝる折ふしつねにとりい
で申候は會報と日誌とかたみのうつし繪とにて候かく
て先づ會報をもれなく繰り申候

あはれやよひの春まではかの學びやに温きみめぐみ
うけ候を今はたゞ繪に見ることぞ恨めしき
講堂の壇上よりは慈愛こもれる校長先生のみ聲もれ南
園館にはいと御優しき中野先生の御作法のみ教うける
心地致し申候運動園農園とりごりになつつかしくかつて

本校の一年史

大正二年十一月より
大正三年十月に至る

會 報 部

一、開校式の舉行

大正二年十一月三日、この日は實に 先帝陛下の御盛徳を偲び奉るべき佳辰なればとて、我が校には特
ここの日を卜して、開校式は擧げられたり。
午前十時開式は宣せられ、郡長の式辭・勅語の奉讀・
本校設立の報告・知事の告辭・來賓の祝辭・祝電の披
露・校長の答辭と、式は形の如く進みて、正午前閉式
は宣せられぬ。
それより知事代理藤岡視學官始め來賓一同は、かね
て設けられたる南園館の古代裝飾、成績の陳列等を
觀覽に供すべく案内せられ、了りて食堂にて立食の饗

應あり、午後一時過全く終を告げぬ。

この日の式後及びその翌日は、古代裝飾、成績品等
を始め、校内一般の縦覧を許されたが、兩日とも人出
いと多く、その盛況真にいふべくもあらず、校連のいや
榮わに榮わまさむことのトせられて、いと嬉しかりき。

二、講堂訓話と心鑑

毎月第一の月曜日、その第一時に於て行はる、講堂
訓話は、吾等生徒修養上の心鑑として、校長先生のい
ども熱誠をこめられての講話なれば、吾等生徒の感動
もまた極めて深く、その徳目金言は、終世忘るべきも
のならねば、特にこの訓話開始以來の心鑑をこゝに掲
げて、常にその記憶を新にし、ますます修養の實を擧
ぐるに努めむかな。

大正二年 心鑑

四月 少年易老學難成。一寸光陰不可輕。

未覺池塘春草夢。階前梧葉已秋聲。(朱子)

五月 報恩感謝(本校學規)

人に施しては、慎みて念ふこと勿れ。施を
受けては、忘るること勿れ。(古語)

- 六月 女子の四行。婦徳、婦言、婦容、婦功。(金言)
- 七月 克己復禮爲仁。(孔子)
- 九月 性相近也。習相遠也。(孔子)
- 十月 境遇か。我れ境遇をつくる。(金言)
- 十一月 豐葦原の千五百秋の瑞穂國は、吾子孫の
王たるべき地なり。爾皇孫就きて治めよ。
行け。寶祚の隆ならむこと天壤と共に窮
り無かるべし。(神勅)
- 十二月 天無私覆、地無私載、日月無私照。(禮記)
- 大正三年 心鑑
- 一月 父母之年不可不知也。一則以喜、一則以
懼。(論語)
- 二月 莫見乎隱。莫顯乎微。故君子慎其獨也。
(中庸)
- 三月 世界は大學校なり。(格言)
- 四月 學問の要は品性の修養に在り。(本校學規)
- 五月 道在爾而求諸遠。事在易而求諸難。(孟子)
- 六月 水は方圓の器に従ふ。(俚諺)
- 七月 子貢問曰、有一言而可以終身行者乎。

九月 子曰、其恕乎。己所不欲、勿施於人。(論語)

三、朝會と讀物

毎朝行はる、朝會にては、まづ東方 皇居の遙拜
に始まり、それより諸種の訓示・告示あり、終りに深
呼吸の行はる、順序なるが、この朝會は、忠の道念を
主として、其他諸種の徳操を養はるべき時なれば、そ
の際、讀み聞かせ語り聞かせうる事も、また主としてこ
の趣旨に依りて選擇せられ、其讀物は己に本校學規・
成申詔書の訓讀訓解了りて、今や本校生徒心得に移ら
れ、吾等の日常守るべき動作・心得に付きて、懇にその
實踐を指導せられつゝあり。

四、食堂と讀物

我が校の食堂はまた一種の訓育場なり。毎日食食時
に於ける會食は、家庭團樂の實習場として、父母に
對する謝恩實現の貴き趣旨の下に行はる、ものなれ
ば、その際讀み聞かせ語り聞かせらる、事柄は、また
主としてこの意味に於て選ばるゝものにて、 昭憲皇
太后陛下の御徳も、乃木夫人の人と爲りも、皆この時に
於て拜聽することを得たれば、吾等生徒は深くこの會

食を楽しみつゝあり。

五、久原家の美談

開校式の行はれてより、程隔たらぬ十一月十二日、晝の會食するや、竹内先生は、「久原家の美談を傳ふべし。」とて、嚴かに語り出さるるやう、「瀧口・増山兩氏の久原家を訪れて、我が校創立費寄附の快諾を得られたる時、久原家の美はしき家道の光は、我が校に學ぶものゝ永く仰ぎて儀範とすべきものなりと思へば、増山氏の語られしを語り聞かすべし。」

「忘れもせぬ明治四十四年二月十三日の事なりき。その日午前久原房之助氏より、「今回の御相談につき、母に申出でたる結果をお答へ申すべければ、本日午後御出でありたし。」との旨、申越されたれば、吾等はその時を違へず、久原家を訪れたり。」

その時「通れよ」と案内せられしは六疊の一室にて、前日導かれし座敷とは、何か様子の變り居れば、訝しきことよと思ひ居りしに、やがて房之助氏は母堂文子刀自を扶けて出で來り、吾等の向うに座を占めて、まづ感慙に來訪の禮を述べ、ツ

ト立ちて正面なる襖の前に至り、端座して頭を垂れ、恭しくその襖を左右に開かれしに、ト見ればそのうち、美々しく飾られたる佛壇にて、燈明さへも已に燃けられたり。さてこそと吾等は始めて事の由を悟りたりしが、なほも眸を凝して、そのなさるゝ様を見て居りしに、二人はいと謹みて亡き夫・亡き父の靈位を拜し、しばらくは何か深く誓はれたるものの如くなりしが、また靜に立ちて席に復し、さてあらためて、母堂文子刀自より創立費全部を寄附せむことを約せられぬ。あゝこの刹那の光景、かくばかり真に孝に、その道を盡くさるること、何たる美はしき心根ぞや、と感極まりし吾等二人、豈涙なくして已むべけむや、瀧口氏も泣きたり。吾も泣きたり。

ああ久原家の今日あるもの、實にこの敬ふべき徳の光の赫灼たるものあるに由るなるべしと、今もなほ瀧口氏と語り出でては、感じ合へり。云々

かく傳へらるる先生、また已に涙を飲んで語らるれば、聞く吾等生徒も一しほ感涙に咽び入りつ。希はくはこのたふとき鑑に則どり、ますます修養の道を辿りて、久原家の厚き志に報い申さばや、と深く深く心に誓ひぬ。

六、指月城山の遠足

大正二年十一月二十六日、時は晩秋に入りて氣尤も清く、小春の和煦恰も登山の好時節なればとて、この日我が校生徒の遠足は、指月山頂に試みられぬ。

心なき日頃の散歩には、さまでその偉大を感せざりし萩城外廓の構へも、今日は我が郷土史の探究、その主なる目的なりと思へば、未だ牙城に到らざるうち、早く已に毛利氏盛時の昔の偲ばれていと貴し。やがて城門を入りて志都岐神社の社前に頼づき、しばし別れて芝生に憩ひぬ。

かくて午前十一時登山を始む。羊腸の小徑攀づるに便ならず、されど風霜今や山溪を侵して、織り出す錦

の眺床しく、吾等は多く疲れずして山巔に達しぬ。眼界頓に開けて、長空愈々澄めり。やがて校長先生は思出多き老松の下に立ち、毛利氏の史蹟につき説かせること懇切、さなきだに哀れぞまさる秋の末、まして親しくその遺蹟に接して、そのたふとき史實を聞く、……感慨頻に催されて、懐恩の念また益々高まりぬ。

時已に正午を過ぎたれば、其處此處に圍居して晝餉を終る。食後またお話あり。それより自由の遊樂を許されたれば、西に東に己がし、展望を擅にす。「ああ見島よ」と、雲煙遙に認め得て、誇りに呼ぶもあれば、「あれ我が校が」と、木の間を縫ひて馳せ寄りながら、懐しげに呼ぶもあり。倉江……越ヶ濱……大井……三見ざりざりに指呼して、會遊を語り郷里を偲ぶものまた尠からざりき。

こかくするうち、日も漸く開けて、山上の眺また漸く淡し。登山の目的已に達せられたれば、下山して歸途につき、やがて我が校に歸着せしは午後四時過なりき。

七、石碑の移築

毛利氏第十代の主たりし重就公は、資性英俊にして、深く心を殖産興業に用ひ、大に毛利氏財政の基礎を定められたる君にして、明治四十一年 朝廷特に昇位の御沙汰を下し賜ひたるもの、實にこの治績を追賞あらせられたるに依りてなりき。

指月城中に巨利あり、満願寺といふ。これ輝元公入城以來毛利氏の歸依淺からざりし祈願所にして、その門前に建てられたる石碑には、重就公の筆蹟を刻みありて、歴代の城主參詣の際にも、必ず下馬して敬意を捧げられきと言ひ傳ふ。さるを星相移り行きて、この由緒ある貴き遺物は、果敢なくも廢殘の寺址に悄立して世に現れず、久しく心ある人をして麥秀の歎に堪へざらしめき。

今このたふとき遺物を移して、その光を放たしめむことは、南園の由緒深く、且實科を標榜して立てられたる我が校の、縁にしに因みて之に當らむこそ、ふさはしき業なるべけれど、移築の議は、こゝに決せられ、所有者への交渉また漸く成りて、いよいよ我が校に移轉せらるゝこととなり、建立の工事全く竣を告ぐるに

至りしは、實に大正二年十二月一日なりき。

超ねてその月十五日午後一時、吾等生徒はこの石碑を仰ぐべき南園館の前庭に導かれ、校長先生より、重就公の治績并にこの石碑移築の顛末につき、詳に説き聞かせらるゝ處あり、それより各組毎に碑前に至り、禮拜して敬意を表しぬ。

碑は堤上の東方にあり。老松を脊負ひて立てる雄姿、南園庭上已に一段の神々しさを加ふ。まして二百年前の遺物として、淋漓たる古致は思出多き昔を語るが如く、公の心血を澀がれたる碑面の文字は、その筆蹟眞に雄渾にして、高き神威の仰がるゝが如きものあるに於てをや。ああ此の君敬慕の資料たるべく我が校庭に建てられたるこの石碑こそ、家の務の基として産を治め業を習ふ、我等生徒をしてそが學びの道を辿らしむべく、永くその光輝を放たるゝことゝはなりたれ。

八、第二回保證人會の開催

第二回保證人會は、大正三年三月三日及び五日の兩日に開催せられぬ。その三日は一二兩學年の保證人を招かれ、五日は第三學年と補習科との保證人を招かれたるが、兩日共出席せられたる方尤も多く、中にも

遠き地方より來られし方には、或は前日より泊掛にて、或は早朝よりの草鞋履きにて我が子可愛の至情より集はれたるもありて、吾等はまづかくまでに切なる親心に感謝を捧げぬ。

我が校にては、兩日ともまづ朝會の有様より始めて、校内隈なく案内せられ、ついで教室・農園・體操場等へ導きて、教へ様の學びの様など、皆それぞれに參觀せしめられしが、いづれも趣味深く感ぜられしものゝ如く、殊に理科の實驗、農園の實習などには、首傾けて餘念なき方々も多かりき。

それより講堂に於て、校長先生より吾等生徒の教養方につき、いと懇なる數々のお話あり。我が校の教育の、いかに家庭に適切なるか、いかに徹底せる仕方なるか、話と實際とを照し合して、さていろいろの感想を抱かれし方々も多かるべし。時已に正午を過ぎたれば、直に南園館に請せられ、こゝにて吾等生徒の手に成りし心ばかりの晝飯は饗せられぬ。

午後はそれぞれ擔任級監なる先生の案内にて、定めぬの教室に集はれ、教へ方・躰け方・或は健康状態などにつき、種々の談話は交換せられしが、かたみに事情

の疏通を得て、ゆくりなくも深き安心の笑みを漏らされし方もあれば、「こんな會なら時々開いてもらいたい」と、包みかねたる誠の望を披瀝せられたる方もありきとか。

殊に吾等生徒のいと嬉しく感ぜしは、皆様の送り迎へとして、履物の仕末・持物の世話、或は便所その他の案内せし時にて、いづれも行き届けるもてなしなりとて、禮いはれざるはなく、中にも年とられし方にて一しほ感謝に堪へられざりしものゝ如く、「この御親切は、かへりて嫁にも話し聞かすべし。」とて、涙ながらに切なる心を出てられし時は、吾等もおのづと嬉し涙のさしくまれき。

かくて、この圓滿なる會合の、終を告げしは、兩日共午後四時過にてありき。

九、陸軍記念日と講話

大正三年三月十日、この日は奉天會戦の大勝ありてより、第十回の記念日なりき。

我が校にては、謹みて記念の祝意を表し、かつは後のつばものを産み出し育て上ぐべき母の務として、國の光のいや増せるこの大勝のもと末を知悉せしめばや

さて、午前八時より記念の式は、講堂に於て行はれぬ。校長先生まづ壇上に出でられ、「我が邦の一躍一等國の班に入りしものは、今日の記念日と海軍記念日との、偉大なる事實の賜物なりといふべく、故に我が國民たるものは、この記念日に逢ふ毎に、必ずその記憶を新にし、永くこの偉績を記念すべきものなり。」との旨を訓示せられて、席に復されぬ。

次いで竹内先生は、今日の記念の講話をなすべく、壇上に立たれたり。先生はまづ「開戦の起因・我が各軍の行動・奉天會戰の顛末・平和の克復・國民の覺悟の五項に分ちて、お話しすべし。」と豫告し、それより各項につき順を追ひて、なるべく簡明に説き聞かされたるが、要所要所の深き注意を拂ふべきところには、先生の語勢一段に強く、おのづと熱誠の迷れるものありしかば、吾等生徒の感興一しは深く、いつしか話中の人となりて、己が拳の握られ居りしを氣づかざりしものさへありき。中にも我が満州軍の策戦や、鴨綠江軍の牽制などのお話には、いとも痛快を覺わしが、最後に擧げられたる捕虜のお話には、思はず戦慄の催され、後の國民を育つるものの、必ず深く心すべきもの

なりと感じ入りぬ。

かくて講話終り式の閉ぢられたるは、九時を過ぐる十分の頃にてありき。

因に今年の五月廿七日なる海軍記念日は、已に大喪期中に入りたれば、御遠慮申して記念の式は行はれざりき。

一〇、第二回卒業證書授與式の舉行

第二回卒業證書授與式は大正三年三月十九日午後二時より行はれたり。知事代理として谷警視臨場せらる。式は校長の擧式挨拶に始まり、證書賞品の授與あり。それより校長の訓辭・知事の告辭・郡長の告辭・來賓の祝辭・總代生徒の答辭等相次いで行はれ、終に卒業生修了生に對する送別の式ありて、四時過閉式は告げられたり。左にその人員を掲ぐ。

卒業生四十五人補習科修了生十四人

知事代理官並に來賓一同は南園館に請せられ、我が校にて搗きつ丸めつしつらはれたる紅白の祝餅は饗せられぬ。色薄けれど赤心こもり、形歪めど誠意滿つ。希はくはこの飾なき眞のもてなしを愛で給はむことを。五時この饗終る。

一一、先生の轉任

大正三年三月廿四日午後二時、本學年の終業式了りて、引續き豊田・松宮・高田三先生に對する送別の式は行はれぬ。

豊田先生と松宮先生とは、共に我が校創立の初より就任せられ、豊田先生は裁縫を始め、圖書・唱歌などの受持にて、又舎監として、寄宿舎の世話をも兼ねられ、松宮先生は數學・理科の受持にて、又久しく校内なる教員住宅に住はれしかば、お二方ともそのお因みは一しは深かりき。高田先生は、習字・家事の受持にてその在任は一年餘なれど、また校内に住はれたれば、そのお因みは淺からざりき。

送別の式は開かれたり。校長先生は演壇に立たれたり。徐にこの先生方の轉任せらるゝ事の由を告げ、我が校に盡くされし多大の功績をたゞへ、更に此の先生方に向ひて、慇懃に感謝の旨を述べ、また徐に席に復せられぬ。

それよりまづ豊田先生・松宮先生・高田先生と相次いで登壇せられ、いと懇なる告別のお詞ありき。先生の壇上に出でらるゝや、未だ何たるお聲の漏れざるう

卒業生修了生の方々は、今日を卒りの別なれば、聊かなりともその行を壯にし、かつは心隔てぬ別を惜しまむとて、一同は賓客のそれのごと、またこの席に請せられ、茶菓の饗は出されき。祝餅の形は圓滿を表し、紅白の色は赤誠を意味す。前途の幸福トひ得られていと目出たし。席上校長先生や他の先生より慈愛こもれるお別のお話あり。高き御恩、深きみ恵、いかでか報い申さるべき。思へば畏き別なりと、涙に誠現はさるゝ方々多く、中には餘りの感謝に忍びかねてか、歎歎の聲さへ出さるゝ方もありて、皆様の心の中おし測られて同情に堪へざりき。かくて薄暮漸くこの目出たく、悲しき會合の席は閉ぢられぬ。

この日、朝鮮總督府衛生顧問山根正次氏來りて式場に列せられ、來賓としての祝辭に代へ、氏が私淑してその平生を知悉せる事實談とて、乃木將軍夫妻のいと尊き性行につき、詳話せらるゝ所あり。また將軍の遺墨數種をも携へ來りて縦覽せしめられたれば、いづれも多くの裨益を得て、その感動も一しは深かりき。特に記して感謝の意を表す。

ち、温乎たるお顔のうれはしげなる様を拜しては、早くもせき敢へぬ忍び音の催されつ。お話の節々、高く低くお聲の断續して、いと厚き情熱の溢るゝにつれ、涙の聲は一しほしげく、果ては感謝の念・惜別の情に堪へてや、歎歎さへ止め得ぬものも多かりき。

ついで松本早知さんは一般生徒の総代として、金子タマヨさんは寄宿舎生徒の総代として、それぞれ高き御恩の御禮申出でられしが、その聲また哀れにひびきて、再び涙の催されつ。されど吾等生徒の誠の露は、幸に先生方の琴線に觸れ、深く深く心に汲入れられしぞありがたき。南園會よりは、それぞれ記念の品贈らるゝこととなり、この日目錄は呈せられぬ。かくて、このいともいとも名殘惜しきお別の式は、三時過閉ぢられぬ。

因に豊田先生と松宮先生とは、その月廿八日奈良に滋賀に、相伴ひて出立せられ、高田先生は四月十七日熊本に向け出發せられき。

一一、入學試験の執行

大正三年四月の始、新に入學せしめらるべき第一學年入學志願者と、補缺入學せしめらるべき第二學年志願者に對する入學試験は、三月廿八日同廿九日の兩日に行はれぬ。

願者に對する入學試験は、三月廿八日同廿九日の兩日に行はれぬ。

今回の志願者は、本郡内は固より、本縣内の各郡、遠きは他縣よりの申込も數々ありき。

二十八日には身體検査・口頭試問行はれ、二十九日には學科試験行はれしが、成績調査の結果入學を許可せらるゝこととなり、四月一日發表せられたる人員は左の如くなりき。

- 第一學年入學 八十四人
- 第二學年補缺入學 五人

一二、本學年の開始

我が校の創立せられてより第三回の學年は、大正三年四月四日開始せられぬ。

この日午前九時より在來の生徒に對し、始業式は行はれ、午後一時より新に入學すべき生徒に對し、入學式行はる。

この入學式にては、先生方と入學生徒・在來生徒と入學生徒、その間に於ける深き誼・厚き情の今日を初と結はるべきものにて、「師と敬ひ生徒と愛で、姉と慕ひ妹と庇ふ、この掬すべき至情の流の、この機を泉と湧

き出でて、學び勉むるその間も、業卒へ果てしその後も、依りつ扶けつ共々に、望の岸へも達し得させむ、大海原をも渡り得させむ。」とまで、いと大なる希望をもちて行はるゝものなれば、入學生徒の親々もこゝに列せらるゝこととなり、親しくこの美はしき光景を觀らるゝこそ、吾等生徒の嬉しく心強く感ずることなれ。

この日式場にて、校長先生は、吾が校に行はるゝ教育の方針と、師弟の間に結ばるべき深き縁にしとにつき、懇に説き示さるゝ所あり。次いで在來生徒の中よりは、中原ユキさん歓迎の辭を述べられ、入學生徒一同は敬禮して、お頼の意を表せられ、「我が妹よ、來たりませ、手を取りて遊ばなむ。」我が姉よ、お供せむその庭へ。」の情意著しく發露せられていとたふさしかりき。

それより入學生徒へは、學規・生徒心得配附せられ、又それぞれ擔任級監の先生より、入學についての必要の事共お話ありて、三時頃終を告げぬ。

かくて本學年の組織は成りぬ。左に先生方の受持學科と、各學級の人員とを掲ぐ。

- 一、先生の受持學科
- 校長先生 修身 中野先生 講文

大正三年

- 河原先生 家事 本永先生 農藝
- 竹内先生 講文 世良先生 家庭
- 中野先生 成文 齋藤先生 裁縫
- 藤井先生 手藝 齋藤先生 裁縫
- 一、學級人員
- 補習科 二十一人
- 第三學年一の組四十七人 全二の組四十八人
- 第二學年一の組四十八人 全二の組四十八人
- 第一學年一の組四十九人 全二の組四十一人
- 生徒總人員 二百九十八人

一四、先生の就任

三月の末轉任せられし先生方を送りて、我が校の中何となく物淋しく、かつはうら悲しき思に閉ぢられ居りしが、新に來給ひし先生方の順次就任式行はれて、こゝに始めて我にかへりしがごと、いと心強くなりぬ。

- 一、安藤チエコ先生は三月三十一日就任せられ、裁縫・手藝を受持たる。
- 一、坂口五郎先生は四月五日就任せられ、數學・理科を受持たる。
- 一、田中タカヨ先生は四月八日就任せられ、習字・圖

畫・唱歌・作法を受持たる。
 一、藤野カネ先生は七月十八日就任せられ、裁縫・手藝を受持たる。
 かくて我が校の先生は皆お揃ひとなりぬ。吾等は嬉しく楽しく學ばむかな。

一五、身體検査の執行

本年の身體検査は四月廿七日より三日間行はれぬ。吾等生徒の健康状態中最も注意を要すべきものにして、明治四十五年度以來三ヶ年變遷の有様を左に掲げて、吾等注意の資料に供しぬ。

種目	明治四十四年		大正二年四月		大正三年四月	
	百人中の割合	百人中の割合	百人中の割合	百人中の割合	百人中の割合	百人中の割合
體強	一五	二九	四一	四三	四三	四三
中等	四六	四一	四一	四九	四九	四九
格弱	三九	三〇	三〇	八	八	八
脊正しきもの	五八	九二	九二	九五	九五	九五
ね曲れるもの	四二	八	八	五	五	五
皮膚病	一六	八	八	七	七	七
内臓病	一	三	三	〇	〇	〇

吾等健康状態の概況左の如し。吾等は今後攝養に鍛錬に益々深く注意を拂ひて、心の本・行の本たる身體健

一しは備はると共に、吾等を慰め勞はらるゝこともまた一しは深くなりて、「母よ女よ」「妹よ姉よ」と朝に夕に依りつ頼りつ明かし暮すことの、いよいよ楽しくなりまさり行くを覺ぬ。

郡會議長瀧口吉良氏、我が寄宿舎に於けるこの特種徳操の發揮に資せしめむとて、曩に松林挂月書伯の筆になれる書幅六軸を寄贈せられしが、今回寄宿舎の擴張につれ、桃の舎、紅葉の舎の増置せらるゝや、氏は吾等の修養を全からしめむがため、また挂月書伯に囑してこの二軸を物せしめ、そのしつらひ殆ど成りて不日寄贈せられむとするの企ありとて、吾等は深く深く氏の深厚なる好意に感謝を表しぬ。

一七、按摩のた稽古

「家族制度の美はしき組立は、實に我が國民性の特色なり、女として他家に嫁しては、夫に事ふる徳の大切なると共にその夫の父母たる舅姑に事ふる道の、より以上大切なことは、人の妻となり人の嫁となるもの必ず深く心すべきことなり。」とは校長先生の常に説き聞かせらるる訓なりき。

年とられし舅姑に事へて、嫁の務を盡くさむ道は數

康の向上に努めむかな。

一六、寄宿舎の擴張

我が校の寄宿舎は家の務の實習場たると共に、また吾等女子の徳操を高むべき特種の精神修養場たり。大江の水その流遠く、南園の庭その馨床しきこの由緒ある舊址に於て、しかも表御殿の建物に接して、建てられたる我が寄宿舎こそ、毛利家歴代婦徳の譽まれ美はしく、貞操の聞こえ高かりし御方々の、そのみ心を鑑とし、そのみ行を手本として、女の道にいそしめばやとの深き望を屬せられたるなれ。されば舎舎に命せられたる草木の名も、南の園に茂り合ひて、色美はしく馨床しきそが徳操の發揮に努めしめむ、この厚きみ心に出でしと思へば、吾等寄宿舎に宿れるもの、常に深く心を用ひて、この切なる望に副はでやは濟むべき。本學年となりて寄宿舎に入れるもの、その數頗る増して五十人にも垂むとすれば、宿れる舎も桃・紅葉の二室を加へ、随つて世話せらるゝ、舎監の先生も二人となり、河原先生と田中先生とが之に當らるゝこととなりぬ。

されば寄宿舎の取締も一しは嚴かとなり、指導の道も

あるべしとはいへ、「お肩の凝り今日はいかに。」「お腰の痛み今宵はいかに。」と、揉みつ擦りつ真心つくしてはり慰むることこそ、いとふさはしき道にして、やがては家庭圓滿の基なるべけれ。さて我が校にては本學年の始より、世良先生の指導の下に、按摩術を習はせらるることとなりぬ。

初の程は手元くるひて力も出でず、何かまじりの悪しかりしが、今はやや手元も整ひ力も入りて、もはや老いたる方の脊中揉みても、さまでお吐りうくる事もあらざるべしと、先生は煽てられき。

吾等は益々この術を習ひて、年とられし方々に吾が真心を捧げむかな。

一八、舊師の訃音

我が校創立の初より約一年の間、吾等を教へ導き給ひし松田先生は、今春東京なる御縁家にて腹膜炎に罹られ、五月十日敢へなくも遂にみまかられぬ。

この悲報の我が校に達して、吾等生徒に告知せらるゝや一同の驚き一方ならず、知ると知らざるごとく、皆共々に深き悲しみの涙に咽びぬ。

先生は、我が校にて裁縫・手藝を受持たれしが、研究

の豊富と技術の熟練とは、吾等學ぶものをして、十分にその要領を得せしめられぬ。また先生は、吾等を慰め吾等を戒めらるゝことも、必ずその底に徹するまでは、止まざらむとする熱烈の至情に富ませられき。

先生昨年四月、病の故を以て我が校を辭せられしも、その後静養の経過漸次よろしく、やがて良家へ嫁がれし吉報さへ承はりて、吾等一同深く喜び、なほ先生の前途益々幸の多かれかしと祈り居りしに、今や忽ちにしてこの悲報に接す、ああこれ何たる悲しき御事ぞや。

その日我等の真心こめし吊ひの詞は、南園會の名によりて遺族の方へ贈られ、先生のみ靈うつしの御前に手向けらるゝこととなりぬ。

ああ今より後、暖げなる先生の御顔、りりしげなる先生の御聲、またいづくにか拜せむ。たゞうつし繪に先生の俤を偲びて、吾等追慕の誠を捧げむかな。

一九、校庭の利用

我が校の校庭は、到る處深き意味に於て利用せられつゝあり。

まづ校門を入れば二基の築山あり。

一は淋檜たる古色に貴き南園の昔を偲ばしめ、一は築ある頌徳碑に永く久原家の美德を思はしむ。その左右廣き庭地と構内所々の適地とには、農園諸種の施設行はれ、四季折々の花も賞すべく、果實に蔬菜に、時によりの珍羞も味ふべし。

南園館の庭内に入れば、滿園の風色雅趣に富み、その植ゑられたる木、その据ゑられたる石、皆美はしき古色の滴るありて、その神々しき眞に懷舊の感禁じがたきを覺ゆしむ。こゝを出で、運動場に到れば、六百坪餘の廣地、おのづから四角に區劃せられ、遊動園木あり、水平棒あり。鞦韆は場の南側に建てられ、テニスコートは場の中央に設けらる。西境の銀杏は開校記念として植付けられ、今は已に生育の期に達して、清く新しき大氣を送り、北邊の藤棚は恰も強き朔風を防ぎて、ゆかりの色に美はしき眺を添ふ。こゝ、實に吾等心身の鍛鍊場にして、また實に得易からざる慰安場たり。

もしそれ校舎校舎の間に造られたる諸種の土圍を尋ねむか。まづ阿武郡土圍はそのしつらひ最も早く、今や己に美はしき緑の苔の蒸したるありて、陸に海に全く我が郡の天小地を現出したれば、寄宿舎に宿れる方々

二〇、羽賀臺の遠足

「羽賀臺は萩城を距る東方二里の處にあり。臺上平坦、廣さ甚だ大ならずといへども、四周開轄、又以て武を練るに足る。文政十四年四月、我が敬親公大に防長二州に令して兵を此處に閱せらる。貔貅三千、滿山の草木皆劍戟ならざるはなく、二州の武威已に大に天下に振ふ。維新鴻業の翼賛、その源泉實にこゝに發せりといふべし。」とは、これ我が郷土史上に特記せられたる一節なりき。

大正三年六月十三日、時は初夏に入りて綠漸く深し。されど月に親しむ杜鵑、かへりて世事の常ならざるを啣つ。この時に當りこの閱兵の史蹟を探りて、時の眺の感まさり行くと共に、ますます深く我が敬親公の偉業を偲ばしめむとて、この日我が校の遠足は羽賀臺上に催されぬ。

午前八時校門を出づ。道すがら松陰神社に參拜して、先生の偉徳を慕ひ、それより東光寺に詣で、まづ毛利氏歴代の墓前に頷づきて、謹みて懷恩の誠を捧げ、殉難志士の墓碑を歴吊して、御國のためには死をも辭せざりし堅き心に感涙を手向けぬ。こゝにてこの寺の史實

の故里偲はるゝ唯一の料ならむか。山口縣土圍は、各郡の位置・交通の關係を示し、また古に今に我が帝國に對して、いかに重要な位置を占めたるか、いかに重大の貢獻をなしたるか、皆この土圍に於て窺ふことを得べし。進んで大日本帝國の土圍を觀れば、太平洋の水廣く、日本の波荒き處、蜻蜓の翼を伸べて飛翔せむとするが如く、我が帝國の宇内に雄飛せむとするこの偉大なる光景は、面のあたりこの土圍に於て知悉する事を得べし。世界土圍は、東西兩半球相並んで設けられ、列國の位置・國交の關係、皆歴然として指點すべく、或は同盟の成立つ所以、或は國争の勃發する所以、またこの土圍之を示して明なり。最後に造られたる萩町土圍は、本年の卒業生修了生の我が校を出づる記念として、その方々の手に成れるものにて、指月の山、その姿雄々しく、阿武の川、その流清々しきあたり、萩町の悠然として位置を占むる光景、また以て我が郷の古を偲び今を知るの資に供するに足らむ。

されば我等生徒は、常にこの意味深き校庭に出で、或は自然の風物に觸れ、或は人爲の施設に接し、おのづと之が感化を受けて、吾が修養の徳を積みつゝあり。

についで校長先生のお話ありき。
高麗焼はその形高雅を以て名高し。道その窯元のあたりを過ぐれば、立寄りて一見す。校長先生また説明を興へらる。

行き行きて峠の峠に至る。爪先上りの坂路容易くは登れじ。まして日は巳に南にありて、暑さ一しほ加はるあり。吾等のうちいたく疲れて飢を訴へ渴を告ぐるものなきにあらねど、相慰めて勇を鼓し、漸くにして頂上に達し、とある茶店のあたりに憩ひて涼をいれ、こゝにて晝餉の半を終る。

休憩半時、元氣全く復したれば、濶歩して福川を過ぎ、やがて羽賀臺の麓に着す。山徑所々に通じて登るに便なり。されど荆棘のその間を遮るものなきにあらねど、相扶けて歩を進め、漸くにして頂上に達しぬ。

宏潤たる臺地、四顧の眺尤も佳し。少憩して疲を醫し、半殘の晝餉を終る。それより校長先生のお話あり。維新回天の發源地として、こゝ、演武の史蹟を説かるゝこと詳悉、軍馬の嘶き遠く聞え、旗幟の閃き近く觀ゆるの感あり。あゝ、我が敬親公閱兵の事ありてよりこゝに八十年、練武の貔貅己に逝きて、また親しくこゝに

威風の仰ぐべきものなしとはいへ、山川情あり、永くその跡を留めてこの偉業を語る。世事變遷の歎、嘗に裂白の血に泣くのみにあらざるなり。吾等はこの貴き史實の探究を得て、修養に資すること深く、仰慕の念また益々高まるを覺ぬ。

お話しり、三々五々相伴ひて遊覽を共にす。福川・大井この臺の東西にあり。紫福・奈古また遠からず。山に谷にかたみに指呼して、故郷を偲ぶものまた尠なからざりき。

とかくするうち夏の日も漸く開けて、西の空また紅の色染むる頃となれば、割愛して山上を辭し、道を大井にとりて下山す。それより海岸の夕景を賞しつゝ、越ヶ濱に立寄り辨天社に參拜す。越ヶ濱小學校の先生方、吾等を迎へて厚く犒らる。感謝己むなし。

かくてまた歩を起し、小畑を過ぎ雁島橋を渡り、濱崎なる住吉神社に參拜す。こゝにて校長先生の今日の遠足についての講評あり。お話しりて解散を命せられしは午後七時にてありき。

一一一、御大葬の遙拜式

大正三年三月廿七日、沼津御用邸に御避寒中の
いと勝れさせ給はぬ旨發表せられたれば、我が國上下の驚き一方ならず、我が校にては、この御報の達すると共に、吾等生徒に對し、この際特に謹慎の誠を表し奉るべき旨訓示せられたれば、吾等は深くその旨を體し、苟めの行にもいたく心を用ひて、只管に御平癒の早からむことを祈り奉りたりき。
さるをその甲斐もなう、青山御所に還啓あらせられしその翌日、即ち四月十一日午前二時、畏くも、崩御遊ばされた旨發表せられたれば、我が國上下の悲痛その極に達し、我が校にては、この御悲報につき、敬悼の誠意を表し奉るべく訓示せられたる時は、生徒一同恐多くも深き哀痛の涙に咽びぬ。
次いで、追號を 昭憲皇太后と申し奉るべき旨の公表あり。超えて五月廿四日午後七時、代々木祭場殿に於て、御大葬の御儀行はせらるることとなりたれば、我が校にては、この日その御式に先立つこと一時、いと嚴かなる遙拜式舉行せられぬ。

その翌廿五日、 先帝御山陵の東方なる、桃山東山陵に御山入の御儀行はれ、 陛下の亡き御靈は、 先帝の御側に侍らせ給ひて、とこしへに婦徳の鑑を示させ給ふぞありがたき。

一一一、稻作と挿秧

實科を標榜して設置せられたる我が校の本領として、創立の初より農業には一しほ深き注意を拂はれ、各種園藝の如き、殆ど計畫せられざるものなく、中にも蔬菜園の如き、共同園に個人園に各種種の施設行はれ、また先生方の個人園もありて、其々に施肥に手入に、負けし劣らじと朝夕注意を拂ふものから、次第に趣味も深くなり、今はあらゆる慰安も皆この農園に求むるに至り、随つて實績の見るべきものも少なからずとて、擔任の先生はいたく喜び居られき。

農業の大本は稲作にあり。我が邦古來瑞穂の國と稱し、米作最も地味に適せるあり、古より稼穡の道のまた最も重んぜられしは、我が史上に特記せられある所なりき。

さればこの農業の大本たる稼穡の道を、實際について知悉せしめむことは、我が校のまた宜しく爲すべき業なるべしとて、本年は第二農園中に約四坪の水田は設けられ、六月廿三日藤井先生豫め米についての講話あり。超つてその月廿六日藤井先生・本永先生の指導の下に、挿秧は行はれ、先生方と補習科・三學年の方々と

にて一株づゝ植ゑられき。稻の種類は神力お町・神力糯にて、除草に灌漑に多くの注意を拂はれしが、その生立ち至つてよろしく、風害もなく水災もなく、この後鳥害さへなくば、今の毛上にてはその收穫も豫想以上なるべしとて、吾等一同樂しみ居れり。

一一二、養蠶と製絲

養蠶の業は遠き神代の昔に始まり、代々の 后の宮の、御躬づからこの業にいそしませ給ひし御事は、古き史にも見わたることなるが、近代に至り、九重雲深き御あたり、蠶飼の道いよいよ進ませられ、御奨勵もまた一しほなりければ、今や專業に副業に斯の道大に開け、輸出品中實にその第一位を占むるに至りぬ。

さればこの養蠶の業は、女子の務としていとも貴き道にて、殊に我が校の如き、家政についての業を主として立てられたる學校にては、いともふさはしき業なるべしとて、我が校にては昨年初めて蠶飼の業を行はれ、その製糸も吾等生徒の手にてなさしめられしが、その成績、初めての手際としては、稍見るべきものあり。』とは、斯の道に委しき郡會議員平野斌氏夫妻の語られしお話なりとか。

今年は一しほその業を進めて蠶量二匁を掃立てられ、之が指導としては田中先生當らるゝこととなり、また郡役所よりは、上符・田中の兩先生之が指導監督の任に當らるゝこととなりぬ。吾等生徒の中よりは、補習科と三學年、殊に寄宿舎の方々主として斯の業に務められたるが、掃立後降雨多かりしため、給桑の加減・湿度の調節など、なかなか心を勞せられしことも尠なからざりしが、これかへつて研究の資となり、經驗の料となりしことも多かりき。

かくて六月十九日掃立てられしより、七月十日三に至り全く上簇を了り、それよりまた五日の後收繭を了りしが、病蠶もなく死蠶もなく、左の成績を得たりしは、先生方の熱誠深き指導に由るものなるべしと、吾等は厚き感謝を表しぬ。

- 上繭五貫二百五十匁 玉繭二百五十匁
- 中繭二百九十匁 下繭五十匁

越つて九月二十八日より上符先生指導の下に、製糸の業は行はれ、補習科の方々に當られしが、六日の後全く終了しぬ。その收められたる生絲及び真綿の量は左の如し。

- 生絲三百五十五匁 真綿百六十五匁

本年の成績斯の如し。之を昨年比して確に進歩の蹟あるを見る。』とは、斯道に精通せらるゝ方々の公評なりとか。

我等はいよいよ勉め勵みて、斯の業向上の道を辿り、萬一なりとも御奨勵の御心に副ひ奉らばやと、深く深く心に誓ひぬ。

二四、野口内務部長の視察

大正三年八月十七日、我が萩町に於て執行の陸軍簡閱點呼場に參列すべく、來郡せられたる野口内務部長は、その日午前九時我が校を視察すべく、安田縣屬を隨へ來校せられぬ。

まづ校長室にて我が校教育の概況を聴き取り、それより校長先生の案内にて、校舎校地隈なく巡視せられしが、折から夏季休業中のこととて、直接視察に供せられしは、設備方面のことのみにて、教授も訓育も、その實際を提供せらるゝこと能はざりしは、我が校の深き憾とせらるゝところなりしが、幸に吾等補習科生徒と農園當番生徒との登校中にて、一班なりとも、農園手

入に従事して、その實況の視察を受くることを得しは、吾等の衷心喜ぶところなりき。

巡視了りて、南園館にてしばし休憩せられしが、その際、南園御殿についての史實及び我が校訓育の實況など聞き取られ、午前十時過辭去せられぬ。

二五、歐洲戰亂の講和

一集一散久しく結んで解けざりし巴爾幹半島の風雲は、埃塞間の斷絶により、端なくも歐洲列強の大戦亂となり、その餘波延いて東洋に及び、我が帝國も國權の伸暢・平和の維持、且は同盟の大義を伸へむとて、已むなく獨逸國に對して宣戰は布告せらるることとなりぬ。

我が國上下の志氣大に昂り、必ずや青島をとりひしめて、歐洲戰亂の恢復に資し、延いては世界の平和に貢獻するところあらむとするもの、これ我が美はしき國民性の今また發揮せられたるものなりとす。

然るにこの時局の報道區々に傳へられ、その真相を誤るものなきにあらねば、吾等生徒をしてこの戰亂の由りて來る所を明にし、又我が國の正義のため、戈取りて立ちたる所以を知悉せしめばとて、我が校にては

日追記)

二六、赤星知事の巡視

本年四月來任せられたる赤星本縣知事は、阿武・大津兩郡の郡況視察のため、十月六日來郡せらるることとなりぬ。

その日正午郡内の有志者百八十名、相謀りて知事を我が校に迎へ、こゝに歡迎會を催さる。郡會議長瀧口吉良氏歡迎の辭を述べられ、赤星知事之に答へ、先づ來任の挨拶を述べ、ついで縣政に對する知事の抱負を披瀝せらる。それより開宴となり、主客款を交へられて和氣盛に場に満てしが如し。我が郡の心ある方々の、眞心こめられしこの清楚なるもてなしは、かへりて深く知事の諒とせられし所なるべし。

かくて午後一時過この一行辭去せられ、ついで一同退散せられて、全く終を告げしは二時過にてありき。

その翌十一日、知事は改めて我が校を視察すべく、午前十時來校せられぬ。

まづ南園館にてしばし休憩の際、校長先生より我が校の教育施設につき、種々の實況を聞き取られ、それより校長先生の案内にて、教室・農園・運動場・其他校舎・

九月三日、講堂に於て講演會は開かれぬ。

午前九時、校長先生はこの講話をせらるべく演壇に立たれたり。まづ今回獨逸國に對し宣戰の布告ありたる旨を告げ、その畏き 聖旨のある所を謹解し、さて改めて巴爾幹半島紛擾の原因より始めて、三國同盟・三國協商の成立、歐洲戰亂の近因、東洋に於ける利害關係に及び、最後に我が國の正義のために立ちたる事の由を、詳細にかつは了解し易く説き聞かされしが、尤も注意を要すべき所に至れば、先生の熱情おのづこ進り、戰亂の光景躍然として目に觀るが如くなりしかば、吾等生徒の感動極めて深く、中にはいつしか拳を握り齒を切りたるを知らざりしものさへありき。吾等はこの整理せられたる講話に依りて、時局の筋道を明にし、また貴き我が國の性情を知悉することを得て、我が修養上得るところまた多かりき。かくて十一時この會は閉ぢられぬ。

因に青嶋は十一月に入りての我が海陸兩軍の總攻撃のため、その月七日遂に陥落しぬ。次いでその月十一日午前十時、我が軍の入城式行はるる筈にて、こゝに全く膠洲灣は我が軍の有に歸することとなりぬ。(十一月十日)

校地等、隈なく巡視せられ、了りて講堂に於て吾等生徒に對し、「婦人の天職」とも題せらるべき一場の訓辭ありしが、言々皆吾等の將來を思はるる、痛切の事のみなりしかば、吾等生徒の感動一しは深く、いかにもしてこのお詞に副ひ申さばと心に誓ひぬ。かくて一行は正午前、明倫小學校に向はるべく、我が校を辭去せられき。

二七、野村男爵の來校

男爵野村素介氏は、展墓のため歸秋せられたるが、十月二十一日午後二時、我が校を觀覽すべく、親戚秋山氏を隨へ來校せられぬ。

男爵はまづ校長室にて、實科としての我が校教育の概況を聞き取られ、それより中野先生の案内にて、教授の有様・設備の模様・其他校内隈なく觀覽せられしが、農園に於ける吾等生徒の作業には、いと深き感興を催されたるが如く、「之こそ眞の家庭の人たるなれ」と微笑を漏されながら評せられきとか。それより南園館にてしばし休憩せられしが、その際數々の懐舊談出で、中にも久しくこの邸に坐ませ給ひし眞松院様の御事につきましては、少壯の際、元徳公に扈從してこの邸

に伺ひし時の事實談とて、その御徳をたへ、この事は生徒修養上にも裨益多かるべければ、事のついでに傳へ聞かされたしと依囑し、なほ茶席・樓上等をも觀覽して、昔を偲び四時前辭去せられぬ。

超えてその月二十三日晝の會食後、竹内先生は男爵依囑のお話を傳ふべしとて、貞松院様の御徳を主とし、毛利家御代の事、八丁御殿・土原御殿のことをも、簡明に話し聞かされしが、吾等はこゝにますます南園御殿についての史實を明にし、殊に貞松院様の萬事に御注意深く、且つ御身内に御手厚かりし御事には、云ひ知らぬ敬慕の念を高めぬ。

因に男爵は我が校の請を容れ、吾等生徒修養のためにとて、「啓智成徳」の聖語を揮毫して贈られたりと。吾等は深く感謝の誠を捧げぬ。

二二八、柴田貴族院議員の來校

前文部大臣にして貴族院議員たる柴田家門氏は、展墓のため十月廿四日歸萩せられたるが、その翌廿五日は、川島なる甘棠園に於ける、故桂公爵縁故の石碑除幕式に參列せられ、またその翌廿六日は萩中學校及び我が校を視察すべくことさらに滯萩し、我が校へはその

は、吾等生徒の感激また一しほ深かりき。

かくて氏は歸路再び祖先の墳墓を展せらるべく、午後四時過我が校を辭去せられぬ。

その翌廿七日晝食後、竹内先生は吾等生徒のため、氏のお話の趣旨に因みて、氏の性格の祖先に厚き事例。母堂並に夫人の徳操。氏が病氣入院中母堂逝去の事柄など、語り聞かされしが、中にも母堂逝去後退院歸宅の事についてのお話には、吾等の眼前その光景の髣髴たるものあるが如く、家庭圓滿のお話は、全くこの實現の美談あるによるものなるべく、吾等は我が郷里出身の方にして、この貴き家庭の範示を受くること、いとも大なる幸なりと深く感じ入りぬ。

二二九、上山前熊本縣知事來校の思出

野村男爵・柴田貴族院議員を我が校に迎へて、このよすがに思出たされしは、今の農商務次官なる上山滿之進氏の、その當時新に熊本縣知事の職を休みて、しばし郷里に閑散の身を養はれしを以て、その間我が縣下中等教育を視察すべく、秋色漸く深からむとする昨年十月初つ方、この地に來り、その月六日我が校を視

日午後二時單身來校せられぬ。まづ校長室にて我が校教育の概要を聞きとり、それより中野先生の案内にて、教室・農園・運動場・其他校内限なく巡視せられたるが、その視察方いと詳細に渡り、或は机間を巡りて學びの模様を精察し、或は農園に入りて作業の實際を細視せらるるなど、尋常一様の例にあらざるものありて、我が校の實況に就ては、「眞面目の遣方なり。」と評せられきと云。

視察了りて南園館にてしばし休憩せられしが、まづ表御殿たりしこの館の手入よく行き届き居れりとて、満足を表し、それより數々の懷舊談に時を移されしが、その際氏の占められたる位置の如き、また先生方の挨拶に對し、席を下りてなれなく接近せられたるが如き、その態度すべて謙遜にして禮意深く、接待に務めし吾等生徒に對してさへ、懇なるお詞を興へられき。それより講堂に於て「家庭の婦人」とも題せらるべきお話ありしが、その趣旨「家庭圓滿の中心は主婦にあり。故に女子の修養はこの家庭の婦人たることに勉めざるべからず。」とて、いと平易なる詞もて、吾等生徒の朝に夕に守るべき切實なる道義を説き示されしか

察せられたる事にてありき。

その日來校せられしは午前九時にて、郡會議長瀧口吉良氏同伴せられき。まづ校長室にて我が校教育の概要を聞き取り、それより校長先生の案内にて、教室・農園を始め、校内限なく巡視せられ、了りて南園館にて吾等生徒のしつらへし晝飯の饗を受け、しばし休憩せられしが、その際毛利家についての數々の懷舊談出て、瀧口氏と相語りて昔を偲ばれし事も多かりきと云。

午後一時よりは講堂に於て「女子の守るべき學問の主義」とも題せらるべき一場のお話ありしが、その趣旨、「我が國の女子は、我が國民性より見たる女子の本分を守りて、眞の良妻たり眞の賢母たらざるべからず。世の風潮に動かされて虚榮に走り、延いて本分を越ゆるが如きは、我が國の女子に、斷じて許すべきものにあらず。故に女子の學問の要は、淑徳圓滿なる婦人となるに在り。殊にこの校に學ぶものは、毛利家の高き恩徳を懷ふの心切なるを要す。」とて、いと懇に説き聞かされしかば、吾等生徒の感激一方ならず、希はくはこの旨に違ひます深く我が校に學ぶ所以を明にせばや、と堅く堅く心に決しぬ。

かくて午後二時過、また瀧口氏同伴我が校を辞去せられぬ。
吹く風だに物思はる、今日この頃、事の因みに往にし記憶の伴はれて、おのづと昔思はるれば、思出のまゝをここに記しぬ。

三〇、校長先生の上京

文部省にては、大正三年十月十九日より一週間、全國高等女學校長並に實科高等女學校長の方々を、東京女子高等師學校に召集し、之が會議を開かるゝことゝなり、我が校長先生はこの會議に出席すべく、その月十五日萩地出發上京せられぬ。

會議は豫定の如く、その月十九日より七日間にて終りしかば、直に出發歸途に就かれ、途次 桃山御陵に參拜し、その月二十九日無事歸校せられぬ。

その翌三十日午後、教育勅語奉讀式終りたる後、食堂に於て校長先生の上京中に於けるお話ありき。

先生はまづ會議の問題・會議の模様より始めて、その間に於ける數々の講話の要領・帝都に於ける諸種の狀況等、いと詳に説き聞かされ、終に伏見なる 桃山兩御陵參拜の模様、並に村野山人氏老夫夫妻の至誠に成

れる、乃木大將銅像拜觀の有様等のお話ありたるが、いづれも裨益多く興味深きことのみにて、吾等生徒の感動渺ならずしが、中にも 桃山御陵の御事には、おのづと嵩高の感催され、吾が身 陵前に額づきしがごと、いと深き敬虔の念に滿されぬ。又乃木大將銅像を拜觀せむと銅像近く登られし時、「一人の老媪清水入れたれた器を捧げながら、先に立ちて登り行けるを見たるが、この老媪こそ村野氏の老妻女ならめ、至誠の人の行には、必ず始あり終あるものなり。」と、先生また至情こもれるお聲もて語られし時は、吾等はいひ知らぬ一種の感にうたれ、宛然小走に急がるゝ老いたる方の、つゝまじげなる後姿を見るが如き思ありき。
お話をりて茶菓のお仕向あり。吾等は深く先生の好意を感謝しぬ。

三一、校業の進展

我が校の一年史として、大正二年十一月より、大正三年十月までの間に於ける重要な事項は、以上列記せるが如し。「我が校教育事業の、かく日を逐ひ月逐ひて發展しつゝあるにつれ、世人の同情を寄與せらるるも益々多く、今や我が校の教育施設は、遠くに近く

に心ある多くの人々の注視を集めらるることとなりたるが如くなれば、この際共に共に一層努力して、このいと榮ある望に副はざるべからず。」とは、校長先生始め他の先生方の熱誠こめて訓へ聞かざる所なりき。

本會の一年史

(大正二年十一月より
大正三年十月に至る)

會 報 部

一、附設事業の發展

我が會の附設事業として、創立以來施設せられたる明治記念文庫・閱覽所・成績品陳列所・娛樂場及び養鶏・養蜂等の事業は、月を逐ひ年を逐ひて、ますます發展し、今やその面目を改めたるものまた尠からず。

中にも養鶏は、本年に入り良種を撰んで取換へられたるものもあり、また鶏舎も、諸種の研究を施せる一棟を新築せられき。

養蜂は在來飼育せる日本種の分封行はれたれども、その結果良好ならず、されど蜂蜜の採獲は搾取に、分

されば吾等生徒は深く深くこの訓の旨を體して、我が校に學ぶ所以を明にし、進んでは吾等生徒の微力なりとはいへ、希はくは我が校校運の進展に盡さばやと、語り合ひては心に誓ひぬ。

離に、いづれもその成績よく、今は陳列所に貯藏せられつゝあり。又西洋種は我が郡農會所有のもの一堂を、研究の料として我が會に依托せられ、今やこれが實驗中にあり。

二、忘年會の開催

大正二年の忘年會は、十二月廿四日午後二時より、食堂に於て催されぬ。

まづ會長として校長先生の忘年會についてのお話あり。「忘年は一年中に起りたる過去の行事にして、記憶するもその要なき、不善事・不要事を忘れむとするものにて、決して善事・要事を忘るべきものにあらず。さて人は前人の知識を繼承して、之に己の經驗を加へ、かくして得たる知識をまた後人に傳達するものなれば、この善事・要事の記憶を十分確實ならしめむには、必ずや之が妨害となるべき不善事・不要事を忘却せしむるの必要あり。これ忘年會開催の理由なりとす。」と

の意味を説き示され、それよりこの忘却方法の一とも見るべき、趣味ある福引行はれたるが、その仕組興あるもの多く、中には奇想天外より落つる的好材料もありて、一同大に笑ひ大に興じぬ。

やがて用意の茶菓は出され、また数々の快談・歡話ありて、春ならぬと和氣盛に堂に満ち、こゝに忘年の目的達せらるゝと共に、一陽來復を期して、新に努力すべき迎年の覺悟も出でぬ。かくて年の終のお別なれば、また來む年の新しき多くの幸を、笑ふ門に迎へばやとて、また大に興じて解散せしは六時頃なりき。

三、送別會の開催

大正三年三月廿四日、我が會の理事にして今回轉任せらるべき豊田・松宮・高田の三先生、並に本年卒業修了せられたる方々の送別會は、この日午後一時より食堂に於て催されぬ。

まづ會長なる校長先生は、この先生方に對し、またこの卒業生修了生の方々に對し、我が會の誠意を表すため、この送別會を開きたる所以を明にし、尙この先生方、並にこの方々の前途を祝福する旨を述べられ、ついで楢見菊代さんの送別の辭・三宅美智子さんの告別

の辭あり、送るもの、送らるゝもの、皆津々として永く盡させぬ友情の、流露せられて、たのもしかりき。了りて直ちに茶菓の饗は出されぬ。

この三人の先生方は、今日がお別の會合なれば、後の思出ともなるべき何か記念を遺されたし、と他の先生方も吾等會員も、たつて御所望申ししに、豊田先生まづ立ちて、「私は唱歌を歌ひませう。」とて聲麗はしく、「思ひ出づれば……」と朗吟せられしが、その韻何となく哀に響きて、満堂ゆくりなくも惜別の至情に動されき。松宮先生は例の無邪氣のかんばせにて、「私の記念としては、皆さんに勤勉家の手本とも云ふべき、鶏の勤勉の仕方を紹介しませう。」とて聲高らかに、「コツケコーロー」と三度迄も、しかも眞面目に歌はれしには、満堂思はずとよめき渡りて興じ合へりき。高田先生またをかしみの態度にて、巧に各行各音について、堂内顧に陽氣立ちぬ。それより所望の矢は、卒業生修了生の方々に向つて放たれしが、何か用捨の處あるにや、誰とて立ち出でらるべきものもなかりしに、「大岩さん頼みます。」と大岩さん頼みます。」といふ聲彼處

此處に起りて、己むなく大岩さんは立たれたり。しかも眞面目の顔付にて、「私は詩吟を致します。」とて、聲朗かに、「鞭聲——肅々——夜——河を——渡る——……流星——光底——長蛇を——逸す——。」その韻悲壯にしてしかもまた流麗、婦人の吟としてその節度を失せざるどころ、また尤も賞すべきものありき。吟じ了らるゝや拍手喝采は盛に起りて、一時は鳴りも止まざりき。

かくてなほ清話快談しきりに出でしも、堂内惜別の雲たなびけるがごと、人々の面上何となく悲愁の色の上り居りしは、また無理ならぬことなるべきか。會は午後五時閉ぢられき。

四、總會の開催

大正三年度に於ける我が會の總會は、會務の都合により、定日を延期して七月二十日午後一時より食堂に於て催されぬ。

まづ中野先生副會長として開會の挨拶あり。それより竹内先生は庶務部理事として、大正二年度に於ける會務・並に決算を報告せられ、ついで今回選任せられたる各部の理事・部長・委員等の氏名を報じ、また新

會員の方々に會則其他の規程を配附せられ、了りて茶菓の饗は出されぬ。

この總會の際には、新會員の歡迎會を兼ね行はるゝ定めなれば、これより直に歡迎會に移ることとなり、中野先生また副會長としてこれに就いての挨拶あり。中原ユキさんが在來會員を代表して、歡迎の辭を述べられ、之に對し新會員の方々は、入會お頼の挨拶を敬禮に表し、「姉よ妹よ、相携へて我が會のため盡さなむ。難きも共に、易きも共に……」の至情掬すべきものありていと床しかりき。

それより餘興に移り、まづ坂口先生のマーチ彈奏あり、詩吟あり。先生のお隱藝の豊富なる、愈々出で、愈々面白かりき。次いで校長先生の一口嘯あり。諧謔の中に諷刺を交へられ、をかしみと眞面目と巧に調和せられて、趣味尤も深く、吾等一同大に興じて歡愈々加はりぬ。かくて午後六時この會終る。

五、大正二年度の決算

本年七月二十日開催の總會に於て、報告せられたる大正二年度經常費の決算は左の如し。こゝに記して參考に供しぬ。

大正二年度經常費決算

一、收入	
1、前年度繰越高	一七、八三七
2、會費	九八、二二〇
3、基金利子	四八、七五五
4、公府毛利家ヨリ禮金	三、〇〇〇
5、別途殘額	〇、〇一〇
計	一六七、八二二
二、支出	
1、献進、贈遺、吊慰費	三二、八八〇
2、新聞購讀料	六、〇八〇
3、書籍器具代	二二、〇七五
4、雜費	八九、四六八
計	一五〇、五〇三
差引殘金	一七、三一九
大正三年度へ繰越 別に基金預入左の如し	
一、基金	一〇〇〇、〇〇〇
内	五〇〇、〇〇〇
1、防長銀行預入	五〇〇、〇〇〇

2、百十銀行預入

五〇〇、〇〇〇

六、我が會の役員

本年七月二十日開催の總會に於て、發表せられたる各部理事以下の役員は左の如し。

學藝部

(附設明治記念文庫・閱覽所・附設陳列の事務を兼ね)
理事(司書) 主任 中野先生

理事

副司書

副司書

部長

委員

- 安藤先生
- 藤野先生
- 世良先生
- 草刈 フジ(補)
- 田村 操(三ノ二)
- 三村 キク(三ノ二)
- 下間 静子(二ノ一)
- 榎 雪子(二ノ二)
- 石川ハル子(一ノ一)
- 瀧口 澄江(一ノ二)

運動部

(附設養鶏場・附設養蜂場・附設娛樂場の事務を兼ね)

齋藤先生

- 中原 ユキ(補)
- 大賀 政(三ノ一)
- 塩見 菊代(三ノ二)
- 吉岡タケヨ(二ノ一)
- 竹内 文子(二ノ二)
- 松本 静子(一ノ一)
- 溝部ハナコ(二ノ二)
- 河村 書記
- 中野先生
- 伊藤 霜(補)
- 河野 千世(三ノ一)
- 松野 花子(三ノ二)
- 江山タキコ(二ノ一)
- 難波アキ子(二ノ二)
- 乃美ハツエ(一ノ一)
- 山根 幾子(一ノ二)

理事

部長

委員

會計部

主任

理事

部長

委員

- 本永先生
- 坂口先生
- 河原先生
- 三宅 節(補)
- 内藤ヨシコ(三ノ一)
- 片山 ヨシ(三ノ一)
- 三上チエ子(三ノ二)
- 山本サチコ(三ノ二)
- 世良 菊野(二ノ一)
- 都築ユキコ(二ノ一)
- 佐々木フサコ(二ノ二)
- 井本 龜子(二ノ二)
- 松本八重子(一ノ一)
- 久保ヒサ子(一ノ二)
- 小河 キク(一ノ二)
- 新庄 貞子(一ノ二)

會報部

(庶務部の事務を兼ね)

理事

主任

- 竹内先生
- 田中先生

我が會事業の發展は、吾等役員の負ふところ尠なからざるべければ、理事なる先生方の指導に隨ひ、共に勵

みて吾が本分を盡さむかな。

七、同窓會開設の計畫

我が校と卒業生、及び卒業生相互の間に結ばれたる深き情誼は、永く永く變はるべきものならねど、さらにまたその會合の機をつくりて、この情誼に深厚の度を加へしめ、ますますその美を濟さしめむことは、母校としての我が校の、宜しくなすべき務めなるべしとて、我が會の主催にて之が計畫行はるゝことなり、まづ第一回開催の期日は、本年十一月二十二日と定まり、またその目的は、智徳鍊磨の修養方面に重きを置き、かつ舊誼を温めて、永くその交情を保たしめむとせらるゝ、在るものにて、これに好適せる事業を加ふべしとの議に協定せられたる由たれば、いよいよ開催の曉には、趣味深く利益多き會合ならむとて、その日の早く來よかし、と待ち居らるゝ卒業生の方々多かるよしに聞く。

八、會館設置の計畫

我が會に會館を特設して、これを我が會の事務所とし、又我が校内會員の會談所、我が校外會員の宿泊所にも供せむ事は、尤も趣味多く利益大なる業なるべしと

て、舊靜養室として使用せられたる建物を、之に充てらるゝこととなり、裝飾其他の設備已に成りて、不日開館せらるべき由なるが、いよいよ開館の上は、我が會の事業に一段の光彩を添ふることとなるべく、また校内會員の享くる幸福はもとより、校外會員の方々にも、母校懐かしの優しき心根より、我が校を訪はれしその時など、いかにその便益を享けらるゝことなるべきか。吾等はその開館の一日も早からむことを祈るものなり。

●會告

◎校外會員の方々へ申す。自今身分及び住所に異動ありたる時は、直に通知ありたし

◎校外會員會費領收

金子ハツ(大井村)

一、金壹圓

會員名簿



會員名簿

特別名譽會員

兵庫縣武庫郡本山村

名譽會員

兵庫縣武庫郡本山村

同

兵庫縣武庫郡打出村

兵庫縣武庫郡彦山村

玖珂郡岩國町

阿武郡郡明木村

阿武郡萩町土原(豊浦郡勝山村)

(大正三年十月卅一日現在)

久原文子

久原房之助

久原清子

齋藤幾太

田村市郎

松浦誠

瀧口吉良

榎俊治

特別會員

- (2)
- 萩町江向(熊本縣飽託郡黒髮村)
 - 同 (吉敷郡嘉川村)
 - 同 河添(福岡縣嘉穂郡碓井村)
 - 本校寄宿舎(岡山縣都窪郡倉敷町)
 - 萩町土原(吉敷郡嘉川村)
 - 同南古萩
 - 山田村川屋敷
 - 萩町平安古
 - 椿村濁淵
 - 本校寄宿舎(都濃郡福川村)
 - 萩町細工町
 - 同江向(吉敷郡嘉川村)
 - 同濱崎
 - 同川島(徳佐村)
 - 同東田町

- 米原 鶴太
- 中野 貞介
- 坂口 五郎
- 河原 夏
- 本 永 旭
- 安藤 チエコ
- 藤野 カネ
- 竹内 新三郎
- 世良 ハツ
- 田中 タカヨ
- 河村 一郎
- 中野 スエ
- 齋藤 タカ
- 藤井 二郎
- 中村 彌兵

舊特別會員

- 阿武郡佐々並村 (死亡)
- 厚狹郡役所
- 奈良縣立櫻井高等女學校
- 滋賀縣立女子師範學校
- 熊本縣玉名郡立實科高等女學校
- 松田 ハル
- 三隅要之助
- 豊田 秀枝
- 松宮 シヲ
- 高田 テツ

ひきこめてなはこそしたへ旅衣
立ちこまるへき別ならねは
忘るなよ程は雲井に成りぬとも
そら行く月のめくり逢ふまで

校内會員 (年齢順・現住所)

(補習科)

- (3)
- 阿部 ミサ 萩町今古萩
 - 多田 マツ 椿郷東分村椎原
 - 草刈 フジ 萩町河添
 - 三宅 節 本校寄宿舎(美禰郡大嶺村)
 - 原 チヨ 萩町土原
 - 難波 ハツヨ 全米屋丁
 - 森重 アキ 本校寄宿舎(大井村)
 - 伊藤 霜 全堀内
 - 堀 千代 全江向
 - 長見 キシコ 全塩屋丁寄留(福賀村)
 - 中原 ユキ 椿郷東分村沼田ヶ原
 - 安達 ハナ 全上野
 - 藤本 ミヨコ 萩町御許町
 - 原 キク 全平安古
 - 松村 さく 全江向
 - 岡 タカ 本校寄宿舎(福川村)
 - 三宅美智子 萩町江向

山根 英子 全河添

- 大 中 テイ 本校寄宿舎(熊毛郡淺江村)
- (第三學年一の組)
- 阿部 タケコ 本校寄宿舎(彌富村)
- 箭島 愛子 全(吉部村)
- 河北 由子 萩町平安古
- 河野 ミツコ 全今古萩
- 大森 チヨ 全濱崎
- 椿 嘉子 椿郷東分村椎原
- 西山 ヨシ 萩町川島
- 君谷喜興子 本校寄宿舎(吉部村)
- 田中ツルコ 全(全)
- 田村 操 椿村沖原
- 齋藤 マス 萩町樽屋丁寄泊(大井村)
- 秋枝アヤコ 全土原寄泊(福賀村)
- 長井 フミ 全橋本寄泊(川上村)
- 山中 幸子 萩町橋本
- 倉増千代子 本校寄宿舎(高保村)
- 齋藤 キク 椿村大谷
- 黒瀬キミコ 萩町江向

三村 クリ、椿村沖原
 中原 トラ、萩町土原
 重枝 フキ、全橋本
 松原 ツル、全瓦町
 大田 ヨシ、全土原
 村木 秀子、全堀内
 内藤 ヨシコ、全江向
 河野 千世、全土原
 片山 ヨシ、椿郷東分村中の倉
 長嶺 芳子、萩町平安古寄泊(須佐村)
 平木 ハナ、全河添
 三浦 ヨシ、全江向
 阿座上サダコ、全江向寄泊(川上村)
 石井千代子、全東田町
 野村 フシ、全米屋丁
 榎原マサミ、全堀内
 堀永フクロ、全東田町
 伊藤ミサヲ、全江向
 松屋 チヨ、全濱崎
 阿部 チヨ、全今古萩

松井 文子、萩町川島
 溝部 ハル、椿郷東分村松本上市
 大賀 政、萩町鹽屋丁
 宮原 ヒサ、全平安古
 米原ハツメ、全江向(熊本縣飽託郡黒髮村)
 堀江ミドリ、全
 村田 須恵、全
 遠藤 トキ、全川島(吉敷郡小郡町)
 佐伯千代子、本校寄宿舎(福川村)
 和田 秀子、全(吉敷郡山口町)
 (第三學年一の組)

栗屋 雪、萩町江向
 山本ウメコ、全濱崎
 藤村 マツ、全江向寄泊(川上村)
 松野 花子、全土原
 三浦 チセ、全濱崎新丁
 山下 シナ、山田村山田
 村上 ミチ、萩町東田町
 三上チエ子、山田村奥玉江
 國弘 トメ、萩町川島

林 清子、萩町平安古
 吉田 壽美、全川島
 田中フミコ、椿郷東分村香川津
 厚東 佐世、全前小畑
 南方 京、全中小畑
 山本サチコ、椿村大谷
 伊藤 フサ、全
 河田 シズ、萩町土原寄留(玖珂郡米川村)
 阿武カメ、全川島
 山崎トシ、椿郷東分村前小畑
 吉賀 トシ、萩町濱崎
 塩見 菊代、椿村椿
 中村 スミ、全椿町
 能美滿壽子、萩町土原
 馬屋原孝子、本校寄宿舎(島根縣濱田)
 金子 シヅ、萩町平安古
 村田 テツ、萩町江向
 三好 嘉子、全濱崎新丁
 井上マツヨ、本校寄宿舎(福川村)
 岩竹ハナエ、萩町平安古

金子 トミ、本校寄宿舎(萩町濱崎)
 長谷 千代、全津守丁
 古橋 喜代、全川島
 金子 清、本校寄宿舎(宇田郷村)
 松岡シスコ、椿郷東分村中小畑
 寺田 クリ、全前小畑
 岡村シゲ子、萩町平安古
 山本 松江、全江向
 三村 キク、椿郷東分村上野
 小野フミコ、本校寄宿舎(奈古村)
 竹重 春、萩町橋本
 安田 ヨシ、本校寄宿舎(福川村)
 鈴木 壽子、萩町西田町
 光田 コト、全熊谷丁
 渡邊 保子、全平安古
 國重 静子、椿郷東分村上野
 河村 豊子、萩町橋本
 阿武 文子、全土原寄泊(福川村)
 (第二學年一の組)
 吉武 静、本校寄宿舎(佐波郡中關村)

増野クリ子 萩町濱崎
 山根 豊子 本校寄宿舎(高俣村)
 藤原 久枝 椿郷東分村中の倉
 山下マタコ 萩町平安古
 北村 光子 全江向
 能美キクコ 全唐樋
 世良 菊野 椿村濁淵
 浮里ミヨコ 三見村
 間 菊枝 本校寄宿舎(神奈川縣中郡高部屋村)
 郡築ユキコ 本校寄宿舎(生雲村)
 横山 ツル 萩町河添
 井町 スミ 三見村
 江山タキコ 椿村雜式丁
 田原 秀子 山田村奥玉江
 齋藤 キク 萩町御許町
 福壽 キミ 全吳服町
 河村ウメヨ 全土原
 河村 ミト 全
 伊佐 喜美 全橋本
 久保田ヒデ 椿郷東分村香川津

下間 静子 萩町吉田丁
 高壽ヨシコ 山田村玉江浦
 井上富美子 萩町江向
 石光 茂子 全下五間町
 吉村 キク 椿郷東分村中の倉
 安田 高子 萩町河添
 末武 満子 本校寄宿舎(椿郷東分村越ヶ濱)
 堀 君代 萩町江向
 山本チヨコ 全平安古
 國司 八重 椿郷東分村鶴江
 宗樂シゲコ 萩町橋本
 高橋タカ子 全御許町
 植村 雪子 椿郷東分村鶴江
 阿武ミユキ 全香川津
 村木フミコ 全
 花村 秀子 萩町堀内
 原 末 全平安古
 吉岡タケヨ 全土原寄泊(高俣村)
 白根 光子 全濱崎
 今地 マツ 全江向寄泊(川上村)

吉田ヨシコ 萩町濱崎
 小笠原マス 全堀内
 野村 文子 全御許町
 渡邊 八百 全江向
 植村 操 椿郷東分村香川津
 重枝トラコ 萩町橋本
 齋藤テル子 全濱崎
 (第二學年一の組)
 植村 君子 椿郷東分村鶴江
 大田 タネ 萩町津守丁
 原田 ヒサ 山田村玉江浦
 高木 梅代 萩町濱崎
 林 ユタコ 椿郷東分村中小畑
 井本 龜子 本校寄宿舎(須佐村)
 前田トミコ 全(地福村)
 工藤 富美 萩町吉田丁
 中隈チヨ全 川島寄留(島根縣濱田)
 佐々木フサ 本校寄宿舎(生雲村)
 吉山アキコ 山田村倉江
 長谷川トシコ 本校寄宿舎(篠生村)

野村 マツ 山田村奥玉江寄泊(椿郷東分村越ヶ濱)
 中村 絹子 萩町川島
 前原 マサ 山田村山田
 中村 ヨシ 萩町川島
 桂木 トラ 本校寄宿舎(小川村)
 村田 千代 山田村玉江浦
 岩田 豊子 全奥玉江
 原川 壽子 萩町土原
 長見マサコ 全鹽屋丁寄留(福賀村)
 藤原ふじの 全平安古寄留(佐波郡防府町)
 竹内 文子 全平安古寄留(佐波郡島地村)
 野上 壽恵 全土原
 堀 綾子 全上五間町
 中村 ノブ 全江向
 惠美須屋ユキ 山田村玉江浦
 齋藤ヤスコ 椿村大谷
 玉井 芳江 萩町江向
 藤山ユクセ 本校寄宿舎(紫福村)
 難波アキ子 萩町米屋丁
 原 クニヨ 本校寄宿舎(紫福村)

村上 マス 萩町東田町
 石川 文子 椿郷東分村中の倉
 横 雪子 萩町土原 豊浦郡勝山村)
 岡本 ミチ 全吉田町
 堀 壽子 全河添
 山下 マス 山田村山田
 石井 壽萬 萩町土原
 上田 ツル 全御許町
 阿武 春枝 全濱崎
 中原 俊子 全橋本
 後藤 アサ 全今古萩
 山中 照子 全橋本
 河村 千代 全西田町
 藤井 良子 全米屋丁
 (第一學年一の組)

伊藤 ヨシ 椿郷東分村中小畑
 村上 政子 萩町土原
 松尾 壽 椿郷東分村新道
 藏貫 ツル 本校寄宿舎(生雲村)
 中村 長子 椿村椿町
 椋木 アサ 萩町熊谷町寄泊(大津郡三隅村)
 久保ヒサ子 萩町東濱崎
 河井 サチ 全川嶋
 岸 静江 椿村金谷
 石川ハル子 全沖原
 松本八重子 萩町江向
 本校寄宿舎(宇田郷村)
 近藤 良子 全(高俣村)
 倉増 太代 萩町江向
 岸森 京 全川島
 金子喜代子 椿郷東分村中津江
 河村 信子 椿村雜式丁
 田中キヨコ 椿郷東分村前小畑
 厚東 フミ 萩町平安古
 武林チヨコ 全東田町
 松本 静子

山下 イヨ 山田村倉江
 中野 幸子 本校寄宿舎(地福村)
 田中 静子 椿村金谷
 中原 則子 本校寄宿舎(福川村)
 松本喜久子 椿郷東分村前小畑
 木村 静枝 本校寄宿舎(島根縣益田)
 土田 ユリ 全(全)
 松浦 ウメ 萩町橋本
 松浦千代子 本校寄宿舎(大津郡三隅村)
 桂 竹子 萩町土原
 神野 サキ 萩町江向
 渡邊 ヨシ 椿村濁淵
 多田 峯子 椿郷東分村新道
 草刈 政子 萩町河添
 乃美ハツエ 全江向
 黒瀬美智子 山田村奥玉江
 増山ウメ子 萩町米屋丁
 増山 静子 全橋本
 (第一學年二ノ組)
 茂住 タミ 萩町平安古

中村 キク 三見村
 倉富 イチ 萩町江向(都濃郡鹿野村)
 富士見 フサコ 萩町平安古
 小川ヨシ子 全
 伊藤 芳子 本校寄宿舎(大井村)
 河村千代子 三見村
 小河 キク 本校寄宿舎(小川村)
 伊藤トミコ 椿郷東分村中ノ倉
 伊藤 睦子 本校寄宿舎(大井村)
 長井 トシ 萩町土原(川上村)
 帥井 あい 全熊谷丁
 厚東 ヨシ 山田村奥玉江
 竹内 好子 萩町古萩
 池田 京子 全熊谷丁
 藤本 芳江 萩町御許町
 武田 アヤ 山田村奥玉江
 田上ヨシコ 椿郷東分村沼田ヶ原
 並川サヨ子 萩町河添
 中島ヨシ子 全土原
 中谷 ツル 全熊谷丁

中原 キク 椿郷東分村沼田ヶ原
 宮川 ツル 萩町濱崎
 田中キクヨ 椿郷東分村香川津
 齋藤 ミツ 萩町南古萩
 藤井 三枝 全江向
 柴田 さく 全
 齋藤キヨノ 萩町土原寄泊(生野村)
 渡邊 嘉子 全古萩
 吉田 貞子 椿郷東分村新道
 齋藤 雪枝 萩町吉田丁
 山根 幾子 椿村椿町
 白井 チカ 全金谷
 末岡ハルコ 山田村倉江寄泊(美禰郡於福村)
 吉屋 ハル 萩町油屋丁
 溝部ハナコ 椿郷東分村上市
 小野 サキ 椿村青海
 瀧口 澄江 本校寄宿舎(明木村)
 田坂 ミツ 椿村河内
 藤田ハツセ 全青海
 新庄 貞子 萩町熊谷丁

校外會員 (年齢順・現住所)

(第一回卒業生)

松野 ユキ 萩町土原
 伊藤 ユウ 全
 綿貫 トキ 大津郡瀬戸崎村
 倉田 チヨ 萩町今魚棚
 津田 エン 全東田町
 竹内 ミツ 全惠美須丁
 高垣 徳子 全古萩
 小澤 歌子 椿村沖原
 田邊 ハル 徳佐村小學校
 金子 ハツ 大井村
 藤田 サト 奈古小學校
 藤井 キク 東京牛込區天神町七五、能勢方
 平田トシコ 萩町熊谷丁
 金子 桃代 椿郷東分村香川津
 (第一回補習科修了生)
 松本 早知 萩町東田町
 宮本 カツ 全南斤河

山本 政子 全平安古
 山本 幸 全濱崎新丁
 中島 スエ 宇田郷村小學校
 田中 冬子 椿村金谷
 齋藤ミドリ 大井村
 久保田ミサコ 椿郷東分村香川津
 村田事 永井 ミツ(入嫁)東京市外大久保町西大久保一九三
 佐々木フシヨ 三見村
 野上 サダ 萩町土原
 倉田 静子 全西田町
 金子タマヨ 福川村
 河上 チヨ 萩町橋本
 (第二回卒業生)
 大岩事 上原 マサ(入嫁)大津郡俵山村角屋方
 松村 しな 萩町江向
 大崎 レン 全南古萩
 國司シズエ 椿村青海
 上田 トミ 東京荏原郡池上四七西村方
 中村喜與子 萩町東田町
 上田 信子 明木村

神代 君子 萩町河添
 大賀 チヨ 全塩屋丁
 島田 壽美 椿村雜式丁
 上田 正子 全沖原
 小野 恭 奈古村
 中原 千代 萩町橋本
 今地 イシ(入嫁)全河添山根方
 倉重マサコ 椿郷東分村新道
 伊藤 於松 大井村
 宮本 タカ 萩町西田町
 河野 幸 朝鮮仁川花町一丁目
 山下 カメ 山田村倉江
 河村タミ子 萩町熊谷丁
 澄田 ハツ 全北片河
 神村 ヨシ(入嫁)全米屋丁
 阪部 スマ 全北片河
 岡部シゲヨ 須佐村小學校
 三好 貞子 萩町西田町
 末成 豊子 全平安古

退會者 (創立以來)

田坂	イト	入嫁
杵築	サヨ	入嫁
岡原ツネコ		
入山	フキ	
山根トシコ		死亡
三浦	初子	入嫁
安藤	ミナヨ	
小笠原	芳子	死亡
波多野	ハル	
松浦	ミチ	
上利	ハツコ	
齋藤	シナ	
中原	ムメコ	入嫁
君山	イト	
田中	順子	入嫁
田中	ヒサ	
三村	アサ	
山田	ヨネ	
石川	ヨシ	

大岡	ヨシコ	死亡
江川	三重子	
白井	タキ	
山川	歌子	死亡
山根	フジチ	
竹内	貞子	死亡
石光	園子	
清水	ヨシ	
原	ウキコ	
小野	重	死亡
田中	ヒサ	

白雪のふりし昔の友ならで
たれかこはましみ山べの里
かたらいし昨日やうつゝ今日や夢
思ひさためぬ世にもあるかな

大正三年十二月十三日印刷
大正三年十二月十五日發行

(非賣品)

編輯所 山口縣阿武郡立實科高等女學校 南園會報部

發行者 右代表者 竹内新三郎

印刷所 國華新聞社

山口縣阿武郡萩町大字東田町二二六二番

